



'95 北京会議へ向けて III

深尾凱子

変わる流れ、  
変わるキーワード

Q&A 北京会議 参加をめぐって



## 今こそ「有事」の意味を問おう

斎藤千代

阪神大震災の現地を訪ねて、テレビの画面、新聞の報道をはるかに越える破壊のすさまじさに声も出なかった。たとえ建物の破壊はまぬかれても、あの地域に住んでいる方、働いている方は、すべて被災者だとしみじみ思った。できるかぎりの救援をすることで、心からのお見舞いを申し上げたいと思う。それと同時に、この大災害をプラスの方向に生かすことによって、尊い犠牲を決して無にしないようにしたいと、改めて心に誓った。

大災害の責めを現政府にだけ押しつける声も強いが、災害対策の遅れは、戦後五十年、歴代政府のすべてに責任があることは自明である。基本的には「戦力による安全保障」を「有事」の最重要点に置き、憲法違反の自衛隊や米軍基地に、四兆円以上もの血税を注いでいることが問題だろう。それにもかかわらず、この時とばかり、自衛隊増強や自衛隊法第八十三条の修正が声高に叫ばれ始めたことは、何とも恐ろしい。

自衛隊の出動は必ずしも遅れたわけではない。午前八時には、二百五十名の隊員が出動している。しかし、消火器もパワーシャベルもない隊員たちは、もう一度整備のために戻らなければならなかった。戦闘訓練を第一にしている自衛隊員が急場に間に合わなかったからといって隊員を責めるわけにはいかない。戦車や戦闘機を持つ自衛隊という「軍隊」ではなく、大型ヘリコプターや消火装置の操作や医療に熟達した「緊急救援隊」こそが必要だったのだ。民間ボランティアがキメ細かい対応したのは、日頃から「人にやさしくする」ことを実行していたからにほかならない。復興費捻出のための消費税率アップもささやかれているが、政府の今年度予算を抜本的に洗い直し、自衛隊や米軍への思いやり予算を改め、政党助成金を全廃するなど、主権者としての納税者がどんなに要求しても、しすぎることはないと思う。という以上に、それこそ私たちの責務ではないだろうか。

## 目次

巻頭言 今こそ「有事」の意味を問おう

斎藤千代 1

連続講座 北京会議への道Ⅲ

変わる流れ、変わるキーワード

深尾凱子 4

Q & A 北京会議参加をめぐる

35

めじやーなりすとのめ 女性アナウンサーの“常識”

山根基世 38

気になる英語 カウンター

奥川睦 40

〔連載〕ペルーの女は立ち上がった 9

第四章 農業改革と村の女・山の女(1)

キヤロル アンドレアス 訳 サンディ サカモト

42

〔連載〕女ひとりドケチ旅 4

辻みゆき 48

〔連載〕看護婦 光と影 21

後藤登茂子さん(2)

増田れい子 58

阪神大震災カンパのお願い

57

TOPICS 大震災で緊急対応 神戸YWCA ほか

68

女から女たちへ――

'95年のメッセージと年賀状から

70

## 変わる流れ、変わるキーワード

深尾 凱子

皆様、今日は私の話を聞くためにお願いしていて、ありがとうございます。

私は一九五五年に読売新聞の記者になりました、一九八九年、五年前まで読売新聞の記者でございました。三四年間、第一線のジャーナリストとして働いておりました。ですから一九七五年の国際婦人年なんかはまだきのうのうのように覚えていまして「婦人年の時はねえ」と話すんですが、よく考えると一九年前ですね、もう。お見かけしますと二〇代、三〇代の方もいらつしやるようですね。（聴衆の一人に向かつて）二二歳ですか。二二歳の人にとって一九七五年の時はいくつであつたか……三歳ですね。三歳のときはこれはもう歴史ですね。改めて認識を新たにするわけです。

九五年に十年ぶりに世界婦人会議が開かれるけど、その前に「国連婦人の十年」があり、さらに一九七五年に「国際婦人年」があつたんですが、それはもう歴史の一章になったと認識を持たなければいけないと思うんです。

これまで坂東真理子さんと斎藤千代さんが話されたわけですが、「国際婦人年」と「国連婦



人の十年」がどのように新聞で報じられてきたか、それをお話できるのはこの連続講座の中では私しかないのではないかと思います、当時の新聞記事のコピーをお配りすることにしたんです。

まず最初、一枚目、日付をもらってください。昭和五十年——一九七五年六月二日の読売新聞の夕刊でございます。第一面に「婦人年世界会議がオープンした」という記事が大きく載っています。最初のところに「メキシコ市十九日」深尾、鈴木特派員」と私の名前が載っています。鈴木は南米におりました男性特派員で、二人で取材した、だから二人の名前になっています。

二枚目ですが、それも同じ日の新聞に載りました。さらにその会議がどんなふうな有様で開かれたか、社会面にまた書きました。「民族衣装鮮やか、婦人の会議」という見出しになっております。まだまだいっぱい送りましたが、一日目の記事だけをお配りします。

三枚目をもらってください。昭和五五年、一九八〇年、つまりメキシコで開かれた会議の五年後に「国連婦人の十年の中間年の会議」がコペンハーゲンで開かれたわけです。その時の記事です。

これも「国連婦人会議が開幕、運動十年延長の提案、そして平等・開発・平和を」、発信地が「コペンハーゲン十四日」深尾凱子特派員」となっております。同じ面の左に「婦人差別撤廃条約を、日本政府、署名を決定」という記事があつたので載せております。

四枚目、また五年が経ちました。日付をもらってください。昭和六〇年です。一九八五年、国連婦人の十年も最終年となりました。日付をもらってください。昭和六〇年です。一九八五年、国連婦人の十年も最終年となりまして、ケニアのナイロビで最終年世界会議が始まったわけですからどこにあるのか。今度は一面のトップ記事ではないですね。ちよつと外れて小さい記事になつ









# 国連婦人会議が開幕

## 運動10年延長<sup>(85年から)</sup>提案



14日、コペンハーゲンで開幕した「国連婦人の十年世界会議」左は韓国  
のあいさつを述べた韓国アン・マルグのマルグ二世女王(左P)

### 平等・開発・平和を コペンハーゲンに140か国3千人

【コペンハーゲン電】「国連婦人の十年世界会議」が14日、デンマークのコペンハーゲンで開幕した。参加国は140か国、総勢3千人に達する。この会議は、国連の「婦人の十年」運動の最終年である。この運動は、1975年から1985年までの10年間、世界の婦人の地位の向上を目的として行われてきた。この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

この会議は、国連の「婦人の十年」運動の最終年である。この運動は、1975年から1985年までの10年間、世界の婦人の地位の向上を目的として行われてきた。この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

この会議は、国連の「婦人の十年」運動の最終年である。この運動は、1975年から1985年までの10年間、世界の婦人の地位の向上を目的として行われてきた。この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

この会議は、国連の「婦人の十年」運動の最終年である。この運動は、1975年から1985年までの10年間、世界の婦人の地位の向上を目的として行われてきた。この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

#### 5年間の活動案

この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。また、この会議では、世界の婦人の地位の向上を目的として、平等、開発、平和の3つの分野について議論が行われる。

### 婦人差別撤廃条約 政府署名を決定

【東京14日電】外務省は14日、国連「婦人差別撤廃条約」(CEDAW)の署名を決定した。この条約は、1979年に国連総会で採択された。この条約は、婦人の権利の保護と促進を目的として行われている。この条約は、1979年に国連総会で採択された。この条約は、婦人の権利の保護と促進を目的として行われている。この条約は、1979年に国連総会で採択された。この条約は、婦人の権利の保護と促進を目的として行われている。

この条約は、1979年に国連総会で採択された。この条約は、婦人の権利の保護と促進を目的として行われている。この条約は、1979年に国連総会で採択された。この条約は、婦人の権利の保護と促進を目的として行われている。この条約は、1979年に国連総会で採択された。この条約は、婦人の権利の保護と促進を目的として行われている。

7月15日 火曜日  
読売新聞 昭和55年(1980年)





ています。

これでおわかりかと思いますが、大新聞のトップを飾る歴史的なイベントだったわけですね。一回目、二回目までは非常に大きな会議であると。三回目くらいになると新聞社もそろそろ飽きてきまして、ちよつと小さくなつたんですね。その辺の経過もおわかりになると思います。

最後の五枚目の記事は、「ナイロビ会議の主役を務めた二人の女性に私がインタビューしまして、読売新聞の「婦人と暮らし」面に出たものです。

ここで新聞社の仕組みをちよつと説明したいと思うんですが、新聞記者は取材して記事を書いて送りますが、本社は特派員の記事を受け取つて、大きなニュースだから一面に載せようとか、四段記事にしようとか決める。私たちが決めるのではないんですね。

私たちは取材して記事をどんどんテレックスで送るんですけど、本社のほうで受け取つて、「これは大変なイベントなんだから一面に持つてこよう」とか「おもしろいから社会面のトップに持つてこよう」とかは、もつぱら編集局長とか社会部長とか整理部長とかが決めるわけです。ですから私がいくらい記事を書いても、受け取るほうの頭が「こんなもの、載せなくていいや」という意識でいると、載らないんです。いかに大きなイベントであるのかをまず社内ですべてPRして、「原稿を送るから大きな記事にしてよ」と説得しておかないと、こういう大きな記事にならないということなんです。

今にしていますと、メキシコとかコペンハーゲンとかナイロビとか、取材に行くのは大変でしたけど、それと同時に新聞社の中での女性運動が非常に大変だったと二十年前を振り返つて思います。まず男性を巻き込んでおかないと大きな記事にしてくれないということですよ。



こういうふうな三つの会議を取材した中で、会議ごとにいろいろと好んで使われたキーワードというものがあったと思います。そういうものを中心にキーワードを追いつながら、時代の流れ、女性運動の変化をお話したいと思います。

まず一九七五年に始まった「国際婦人年」、一九七六年から八五年までが「国連婦人の十年」ですね。この「国連婦人の十年」とは何だったのかを非常にわかりやすく述べた調査の結論があります。

これは一九八五年、国連婦人の十年の最終年に、国連がナイロビ会議に備えて、世界の女性の現状を分析して述べた結論なんです、こう言っております。

「この十年はどういう運動であったのか。地球上の平等を秤にかけてみると、バランスを失って左右に大きくかしく。女性という目盛りを付けた秤は家庭責任を担って深く沈み込む。一方男性という名の目盛りは権力とか仕事を担ってピーンと跳ね上がる。国連婦人の十年とは、仕事とか家庭責任とか富とか力とかありとあらゆるものがどちらかに偏るのでなく、もう一度分配し直して、女性の目盛りに乗っている重いものを男性のほうに乗せ、権力とか富とかを男性から取って女性のほうに乗せる。そしてこの秤が水平に公平に保たれるように分配して、地球上の秤のバランスを調整しようという運動なのだ」という結論を、調査書の最後に書いております。これは非常にわかりやすいとえだと思います。

さて、国連婦人の十年が終わって、さらに十年が経ったわけです。一九九五年の北京会議ですが、そこで何をするかというと、この天秤が、女性と男性とうまくバランスをとって水平が保たれているかということ、もう一度検証し直すということを頭においたらわかりやすいか



と思います。

## 95年のキーワードはパートナースhip?

私は五年前、新聞社を定年前に退職しまして、埼玉短期大学の教授職に就き、さらに二年前から茨城県の県立婦人教育会館の館長を兼務しております。合間に講演をしたり、執筆をしたりジャーナリスト活動をしたり忙しい毎日を送っているわけですが、またたくさんの政府の審議会の委員をしていまして、その一つに総理府の婦人問題の有識者会議の委員があります。その依頼で今年の三月にニューヨークの国連で開かれた北京会議の民間会議（フォーラム'95）というんですが、準備会議に行っていました。

そこでは、すでに来年の北京会議で主役を務める人がズラリと出てきて基調演説をしたり、シンポジウムでパネルディスカッションのパネリストになったりしておりました。

こういう人たちがイニシアティブを取って、北京会議は大体こういう感じになるだろうなど想像がついたんです。北京会議は二つの会議があるのは皆さんご存じですね。政府間会議とNGO会議のフォーラム'95です。政府間会議の議長はガートルード・モンセラさん、タンザニア出身の女性が議長を務めます。片やNGO会議のほうはタイの出身でスパートラ・マースディットさん、タイの婦人問題の担当大臣をなさった方です。

そして主催国が中国。これを聞いてピンときたと思いますが、完全に発展途上国主導の会議になるであろうということがわかりますね。



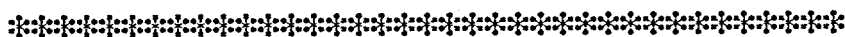
モンセラさんは、英語もペラペラで力強い演説をなさる方です。演説のすべてを今日ご紹介するわけにはいきませんが、印象深かったのは演説の中で何度も何度も「これからは男性とのパートナーシップが大切である」と、おっしゃったことです。

一方、NGO会議の責任者になるタイのマースディットさんは演説の中でこう言っていました。「これからは政府側に参画している女性たちと、民間側の女性たちが互いにパートナーシップを組んで、協力しあつて効率よく行動しよう」と。やはりパートナーシップということを盛んに口にするんですね。

このパートナーシップということばは、前三回のメキシコ、コペンハーゲン、ナイロビの会議のときにはそんなに印象深く耳に残ってないですね。男性とのパートナーシップという言葉はまだ強調されていませんでした。ここ十年、二十年経つうちに、男性を敵に回すのではなく、男性を巻き込んで男性と女性のパートナーシップ、女性同士のパートナーシップ、高齢者と若い人とのパートナーシップ、あらゆる人たち、あらゆる階層、異なる性の人たちのパートナーシップこそが世界平和に通じる道であるという意識が高まってきたのです。北京会議では、このパートナーシップがキーワードになるであろうと感じました。

## 75年はヒューマン・リソースズ

それでは、一九七五年の会議のときは何がキーワードだったかなあと改めて振り返ってみました。国際婦人年、インターナショナル・ウイメンズ・イヤー、私にとっては、国際婦人年の



第一回世界婦人會議が三回の世界會議の中で最も印象深い會議でした。この會議について私はこのように書いております。——「ローサ・メヒカーナ」——メキシカン・ピンク。どきっとするようにあざやかなピンクが、メキシコを象徴する色だ。「國際婦人年世界會議」はピンクの色ではじまった。——と、この會議を描写しているんです。——沿道にズラリ飾られた婦人年ポスターの基調色はピンクとブルー、この色は聖母マリアのローブの色、カトリック国メキシコにとつて大切な色だ。——自分でいうのもなんですが、これは非常に褒められた記事です。編集局長なども「素晴らしい記事だ。女性でなければ書けない記事だね」と、お褒めをいただいた記事でございますが、いま読んでもよく書けていると（笑）思います。このローサ・メヒカーナとは、日本ではちよつとお目にかかれないようなショッキング・ピンクなんです。それがメキシコの色です。この色のポスターが會議が始まる直前になるとずらーつとストリートに貼られていた。それにちよつとブルーがあしらわれていたことをよく覚えています。

とにかく歴史始まつて以来、世界で初めての女性會議ですから、非常に印象が深かった。その印象がメキシカン・ピンクの色とダブつて今も強烈に思い起こされるわけです。

この會議の事務局長だったのは、フィンランドの弁護士であるシピラ夫人でした。

その方、非常におしゃれな方として、記者会見にも次から次へファツションな服を着てらっしゃるわけです。開会のときはどんな服を着てらっしゃるかな、というのがジャーナリスト注目の的だったわけです。すると彼女はなんと非常に地味な白と黒の細い縦縞、遠くから見るとグレーに見えるスーツを着て現れました。しかしその襟元にローサ・メヒカーナ色のスカーフがとていい形に結ばれていました。ああ、そうか。主催国メキシコに敬意を表すという





意味でローサ・メヒカーナ色のスカーフを結んできたんだなと思いました。おしやれというのはああいうふうにするものだ、大変参考になりました。国際会議の演説とは立派なパフォーマンスなんですね。

そのシピラさんが開会演説の時におつしやつたことはとても衝撃的でした。——「人間は地球上の大切な資源だ。その大切な人的資源の半分は女性である。それが活用されずに台所に押し込められて浪費されている限り、この地球上に繁栄はない。」

ちょうど国際婦人年の一九七五年の前の年が石油ショックの時だったんですね。それで世界中が石油がどうか、資源がどうか、資源、資源と大騒ぎをしていたのです。その次年だったのでシピラ夫人はそれを引用して、資源というのは石油とか石炭だけではないんだぞ、人間も人的資源、ヒューマン・リソースズ (human resources) と呼ばれて立派な資源である、と。——今でこそ日本でも人的資源ということばは普通のことばになつて新しいことはないですけど、はつきりと演説で聞いたのは初めてで、それまではあまり日本の新聞もまだこのことば使いませんでした。——そしてハーフ・オブ・ヒューマン・リソースズ、大切な人的資源の半分は女性だと。資源を活用しないで浪費していたら繁栄はないと。世界の繁栄、平和のためには女性を活用しないと駄目だぞという論理の演説でした。

その会議ではハーフ・オブ・ヒューマン・リソースズ・ウイメンと分科会でもシンポジウムでもずいぶん使われたと記憶しています。この年のキーワードを探すとしたら「ヒューマン・リソースズ」、人的資源の半分は女性であるという認識でしょうね。

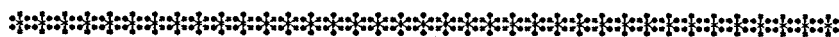
## 世界行動計画は宝の山

国際婦人年では、その結果二・三項目にわたる膨大な世界行動計画 (World plan of Action) が採択されたわけです。これを読んでみますと、「人的資源の半分は女性である」ということを基本にして、だからこそあらゆる分野——政治の分野にも、教育の分野にも、組合の分野にも、マスメディアにも、あらゆる分野に、男性だけでなく女性ももつと増えなければ地球の発展はおぼつかないだろう」ということがあらゆるところに書いてあるんですね。

私はこの世界行動計画について原稿を書いて送る時、ドキドキしながら「そうなのよ、よくぞ言ってくれた。そうよ、そうよ！」という思いで書いていました。私が身を置いているマスメディア、新聞にも雑誌にも放送にも、もつともつとあらゆるところに女性が増えなければ駄目だとちゃんと書いてあるではありませんか。

当時の新聞社がどうであつたかというと、それは全くひどい男性中心主義でした。今でも新聞社は、ほとんど真つ黒な世界です。ほとんど男性しかないという世界ですが、それでも二十年前はもつとひどかつたんです。例を申し上げると私は一九五五年に読売新聞に入社し、その年二十人の記者が採用されたのですが、十九人は男性で、私はたつた一人の女性記者だつたわけです。

私の先輩に三人の女性記者がいました。最初のパイオニアは皆さんご存じの金森トシエさんで、新聞社を定年で辞めてから神奈川県的女性センターの館長さんをなさつた方です。その金



森さんが私の三年先輩。それから一年おいてさらに二人入社、私は読売新聞社が採用した四人の女性記者だったわけです。

ところがトップの人たちはもうこのくらいで女性記者は十分だと思つたのか、私のあとは十七年間女性を採用しませんでした。

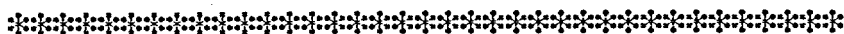
今のように「男女雇用機会均等法」もあるわけではないですから、新聞記者を採用する時の広告に——来年度新聞記者採用（男性に限る）と、堂々と書いてあつたんですね。女性は試験も受けられない。初めからシャットアウト。

このころはまた、機会均等法があるにも関わらずそういう状況が出てきますけど、今はさすがに「男性に限る」と堂々と広告する企業はない。それは法律違反ですから。しかし最初から試験も受けさせないという時代が、長く続いたんですね。

だから金森さんと私はいつも「悔しい、悔しい」、毎日朝から晩まで、会社に来ては怒り、一緒に御飯を食べながら怒り、帰りにも怒り、と怒り狂っていました。

編集局長のところに行つては「もつと女性を採用してください。読者の半分は女性でしょう。どうして男性ばかりで記事を書いてバランスのとれた記事ができるんですか。もつと女性の目が必要でしょう。女性を採用してください」と、お願いするんですけど、そういう論理とか、そういう視点とかは、全く当時の男性にはわかりませんでした。私たちが何を言っているのか理解してもらえない時代が長かったのです。

「君たちは何を言っているんだ。どうして男性が書いた記事ではいけないんだよ。違わないじゃないか」と、本当にわかつてもらえなかったんですね。



だからこそ、世界婦人会議で世界行動計画が採択され、二二三項目にわたって細々と「政治の分野にもつと女性を入れなさい。新聞などのマスメディアにもつと女性を入れなさい。そうでなければ公平で客観的な報道はできません」と縷々書いてあるのを見て、「万歳！ だから言つたじゃないか。国連よ、ありがとう」という感じで記事を書いて送っていました。

私は解説記事の中で「人的資源の半分は女性である、だからもつとあらゆる分野に女性が進出するべきだ」という視点に立つて作られた世界行動計画は、まさに女性にとつて宝の山である」というふうに書きました。

日本代表であつた藤田たきさんが、それを読んで非常に気に入られて、雑誌に「宝の山とは、言い得て妙だ」と書かれ、また講演でも紹介してくださつたので、そのことが一人歩きして方々で引用されたことを覚えております。

さらに五年経ちまして、一九八〇年、コペンハーゲン会議の話に移りますが、その前にちよつと脇道に逸れます。

### 女性問題から両性問題に

インターナショナル・ウイメンズ・イヤー、国際婦人年は突然天から降つて湧いたように決まつたわけではないんですね。なぜ国連はこの年を国際婦人年と決めたかということですが、それまでにやはり国連のいろいろな動きがあつたわけです。一九四八年の世界人権宣言とか、さらに一九六七年、婦人差別撤廃宣言とかがあつた。そしてここに至つたのです。



もう一つの流れとしてアメリカで女性解放運動が非常に活発に行われていた。それも大きな力になりました。いわゆるウーマン・リブといわれるアメリカの女性解放運動なんです、この発端となつたのは一九六三年にベティ・フリーダンという女性の書いた「フェミニン・ミステイク (Feminine Mistake)」という本だったのです。これは日本では「新しい女性の創造」と訳されて大和書房から出版されております。

実は私は一九六一年から一九六三年まで、アイオワ大学のジャーナリズム学部大学院の学生としてアメリカに留学しておりました。留学が終わつていよいよ帰つて来る年にその本が出たんです。あちこちで評判になつてベストセラーになつてゐる。私も早速買つて読んだことは読んだのですが、それが後にウーマン・リブの発端になる、あんな大きな騒ぎになるとは、実はアメリカにいたときにはわかりませんでした。

まだお読みになつてない方は歴史を勉強するつもりで読まれるといふと思うんですが、それまでの、女性とは女性らしくあるべきだ、あるいは、「女は女らしく結婚するのが幸福なのよ」といふ、社会通念に疑問を投げかけた。「本当にあなたは幸福なんですか? 車を二台持つて家には大きな冷蔵庫があつて、ボランティア活動をやつたりしているけど本当に幸福なの?」と、何百人もの主婦たちに、自分の足で歩いてインタビューし、実はそうではないんだ、主婦と呼ばれる人たちの心の中に鬱々として楽しまない、「本当にこれが女性の幸福なんだろうか」といふ思いが渦を巻いていることを掘り出して書いた本なのです。これが発端となつて、波紋を広げて女性運動の流れにつながつていくわけです。

女性運動というのは英語では Women's liberation movement、それがウイメンズ・リブと略さ



れて日本語でもウーマン・リブというふうになったわけです。最初は「Oh! She is a woman's liber (彼女はウーマン・リブ野郎さ)」というふうにならば嘲笑の対象になっていたのですが、それがだんだん本格的な全女性を包み込む大きな流れに変わっていくにしたがつて、リベレーションが取れてウイメンズ・ムーブメントと変わってきました。

それにつれて日本でもウーマン・リブということばはだんだん死語になってきました。女性運動と訳すようになりました。さらにフェミニズム運動と言ったりしております。

それがさらに変わってきて、アメリカでも最初の頃は女性問題、すなわちウイメンズ・イシュー (women's issue) と言ったのが、最近ではこれは女性問題ではない、女性問題≠男性問題だとだんだんわかってきたんですね。女性が女らしさというものを押しつけられて悩むように、男性も男らしさ——男は泣いちゃいけないとか、妻子を養わなければいけないとか、を押しつけられている。男も犠牲者だということがわかってきた。そうなると女性問題では片付かなくなってきた。そこで最近の論文ではジェンダー・イシュー (gender issue) というふうになつてきております。ジェンダーというのはご存じのように性、男性・女性の性別という意味ですね。男と女の両方の問題であるということです。

日本語ではこれを訳せないとみえてジェンダー問題となつています。最初は何のことかわからないかも知れませんか。ジェンダー問題とは、かつての女性問題と、男性問題をひつくるめたもの、すなわち性差別や男女の平等問題全てをひつくるめたものと考えていいでしょう。

そういう流れがあつて一九七五年の国際婦人年になったわけです。

## 80年のキーワードはシェア

さてそこで一九八〇年へ行きたいと思います。舞台はコペンハーゲンです。これは国連婦人の十年中間年、英語でMid-Decade Conferenceです。

この会議で最も頻繁に使われたことはシェア (share) ということばでした。日本語にすると「分かち合い」ですね。第一回世界婦人会議から五年経っていますから、女性が、政治、教育、組合、マスメディアなど、これまで男性が独占していた分野にどんどん進出しうまいと考えがちよつと変わつてきて、あらゆるものを男性と女性でシェアしましょう、分かち合いましようという意識になつてきた。男性も仕事仕事と言つていないで、女性が今まで分担してきた家事や育児をシェアしなさい、男性が女性の分野に進出しなさいという考え方がこの会議では新たに強調されました。

男は仕事、女は家事育児と、別々の分野を独占したり押しつけられるのではなく、あらゆることを分かち合ひましょうということなんです。同時に先進国対発展途上国の間のシェアの問題も大きな話題になりました。途上国は限られた資源や、技術を先進国が独占するのでなく途上国にも残しておいてください、私たちにも資源や技術をシェアさせてくださいと主張し、男性対女性だけでなく、先進国対途上国の格差の問題が、シェアというキーワードで議論されたと思います。

この年は同時に大きなイベントとして、ご承知の「女性差別撤廃条約」が署名された年です。



最初申し上げたように女性差別撤廃条約、英語では条約はconventionと言います。最初日本ではwomanを婦人というふうに訳しました。ところが婦人ということばは結婚した女性であるとか、成人した女性であるとか限られた女性を指すものだ、でもこの条約は赤ちゃんから老人まであらゆる女性に関するものだから婦人ではおかしいではないかと、途中から女子に変わったのです。時代の流れによつてwomenということばの解釈が変わつてきたのです。

最近はどうですか。「あごろ」では「女性差別撤廃条約」と、「女性」を使っていますが、政府はいまだに「女子差別撤廃条約」を使っています。

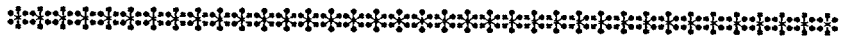
婦人センターといつていた施設も女性センターと名前を変えているところが多いし、「婦人」は古くなっている。このへんも日本の女性の考え方の流れが見て取れます。

## ことばも ジェンダー・フリー時代に

この「女性差別撤廃条約」、皆さん内容はご存じでしょうが、もう一度この際お読みになることをお勧めします。非常に革新的な条約なんですね。

この革新性は、大きく括ると二つになると思います。一つは母性という概念。これは母性を新しい概念で解釈しているということです。もう一つは性別役割分業そのものが差別であるということがはつきりと書いてある、この二つがこの条約の革新性かと思えます。まず前文にこう書いてあります。「母性の意味を十分に認め、出産は決して女性差別の理由とされてはならない」とうたつた上で「しかし、子どもの養育は両親と社会で責任を分担すべきである」と。





それまでは日本もそうですが、世界的に、「女が子どもを産む、だから子どもの養育は女の責任である」というふうにくつつけて解釈されていて、母性とは産んで育て上げること、育てるのは母性本能があるからだ。だから子どもを捨てたりすると「母性喪失、母性本能はどこへ行った」とか、「鬼の母親」とかいわれてしまうんだけど、条約では「子を産むのは女であるが、養育は両親と社会の責任」と、はつきり書いてあるのが革新的だと思います。

日本ではどうなのでしょう。少しずつは変わつていても、日本の男性の中にはそのへんがまだまだわかつていない人が多いのではないのでしょうか。「育児はやつぱり女の仕事だ」と、信じて疑わない人が多いんですが、アメリカでは女性運動やこの条約の結果、母性とか父性に関することははつきり変わつてきているのです。

日本では母性とか父性といいますが、両親性ということばは日本語で出てきているのでしょうか。英語では育児ということばは *mothering*、マザリングということばでした。ところがマザリングは今や死語になつてきています。現在では育児は *parenting*、ペアレンティングといえます。ペアレント、すなわち両親の責任だと。「マザーフード」ということばはあまり使われなくて、「ペアレントフード」ですね。だから明らかに英語ではその変化が見て取れるのです。

ところが日本語の場合、両親性ということばが出てきてもいいんですが、お目にかからないですね。だからペアレントフードということばの訳語が日本語にありません。だけどことばは大切ですよ。意識がことばを変え、ことばが意識を変えますから。

それから養育者、子どもを育てる人ですね。ケア・ギバー (care giver)、こういうことばも

出てきています。

すなわちgender free（ジェンダー・フリー）、性別がなくなっていることばが増えてきている。男性と女性、両方含むような言葉が出てきている。思い出しただけでも、たとえば主婦は英語でhousewife（ハウスワイフ）だったのが最近はhomemaker（ホームメイカー）、ホームを作る人といっています。男性でも「主夫やっていますよ」という人はたくさんいます。男性も胸を張って「Oh, I'm a homemaker」と言っています。

この女性差別撤廃条約には、「女性差別は人権の侵害であり、社会の発展を阻害する」とか、「国の発展、世界の福祉と平和のためには、すべての分野に女性が男性と同等に最大限に参加することが必要だ」といった、革新的なことがはつきりと書き込まれているのです。

日本政府もこの条約に署名して、それに近づけるべく法律も変える、社会通念も変える、固定観念も変えるというふうに約束したわけなんです。政治家も我々も、女性も男性も、女性差別撤廃条約をもう一回読んで認識を持つことが大切だと思います。

## 85年のキーワードはアクション

さて、さらに五年が経ちまして、一九八五年、舞台はナイロビです。これは「国連婦人の十年」の最後の年です。英語でEnd of Decade Conferenceと言われています。舞台がアフリカに移りました。これは私にとって、別の意味で非常にショッキングな会議でした。

まだ「女性問題の解決は、水汲みの解決から」というレベルでの討論が多い会議でした。開



発途上国は水道どころか、家のそばに井戸さえないところが非常に多くて、泉とか川に、半日、一日とかけて、水を汲みに行くところが多いわけです。水を汲みに行くだけで一日過ぎてしまう。だから女性は字を習う暇がない。したがって識字率が低く、家族計画を実行しよう、計画出産をしようというパンフレットを渡されても読めないのです。

風が吹けば桶屋がもうかるではありませんが、まず女性の地位を向上させるためには家のそばに井戸を掘ることが先決問題だという議論になるのです。

水汲みとかたき拾いの労働から女性が解放されなければ、女性問題は解決されないという議論ですね。しかしよく考えてみれば五〇年前、戦争に負けた直後の日本も今日のアフリカの女性たちとそう違わない状況にあったのではないのでしょうか。

新聞の縮刷版を見ますと、終戦直後、農村では女性たちがまず簡易水道を引く運動、それからかまどの改造運動、そういうものを始めています。いま朝日新聞に連載されていますね、効率の悪い暗いところで女性たちがうずくまってご飯を炊いていた。効率の悪いかまどからエネルギードンドン逃げてしまう。だからまずかまどを改造しよう、簡易水道を引こうという運動を農村女性が中心になってやっていった。その活躍ぶりが昭和二二、三年頃の新聞の婦人面にはつきりと記事になって残っています。

アフリカの女性の現状はまさしく五〇年前の日本の女性の姿なんです。

女性問題を解決するためには歴史の縦軸と横軸を振り返ること、すなわち縦と横の視点が大切だなとつくづく思いました。

この会議でのキーワードはaction（アクション）だったと思います。この会議の事務局長



はフィリピンのシャハニさんという方で、私の単独インタビューした記事の見出しにもなっている通り、「次は具体的実践の時代である」、アクションの時代であるとはつきり言い切っています。

「婦人の十年も終わりに近づいた。十年かけていろいろ討論してきた。しかしいつまでも討論していても仕方がない。もうお題目とかキャンペーンとか、不平不満はおしまいにしよう。アクション！とにかく具体的に一つ一つ実行しよう」ということで、アクション、アクションということばが会議中とびかっていました。

ですから一九八五年のキーワードは「アクション」だと思っています。

ナイロビ会議を終えて私はジンバブエ、さらに南アフリカを経て日本へ帰ってきたのです。日本に着いて次の日、我が家で起こった事件のショックから私はまだ抜け出せないというか、あの時のことを思うとまだからだが震える思いです。

南アフリカからの直行便で、二十三時間後には日本に帰ってきました。すぐに寝てしまつて次の朝うつらうつらしているとどこかでジャージャー音がする。何やら浴室のほうでジャージャーと音がする。行つてみると大学生の長女が髪を洗っている。朝シャンがあの頃流行つていて、朝シャンしていたわけです。シャワーからシャーツと潤沢にあふれているお湯を使つてジャージャーと洗っている。私は思わず「わーっ、やめなさい！」と水道をひねつて止めてしまった。つい昨日まで、一晩かけて水がめを頭にのせて家に帰ってくる女性たちを見て、「女性問題の解決はやっぱり水汲み問題の解決から」と言つたり書いたりして、わが家に帰ってきた



ら私の娘がのんきにジャージャーお湯を使っている（笑）。

娘はきよんとんとして「どうしたの?」「アフリカではねえ…」と言ったところで娘はアフリカに行ったこともないし、私が何を言っているのかさっぱりわからなくて「早くしないと学校に遅れちゃう」と騒いでいる。私これはどうしたらいいんだろうと、そのギャップに悩みました。でもその日の夜には私もジャージャーとお湯を出してお風呂に入っているわけです（笑）。どうしたらいいんでしょうね。

あれから十年経ちまして一九九五年、来年はいよいよ北京（Beijing）の会議ですね。

さつきも申し上げたように多分パートナーシップとか、イコール・パートナー、女性と男性はイコール・パートナーであるというようなことばがふんだんに使われるだろうと思います。

また「アクション」ということばが再び持ち出されるだろうと思います。国連婦人の十年のテーマは「平等・発展・平和（Equality, Development, Peace）」でしたが、来年の会議のテーマはこの前にアクション・フォー（action for）が付きます。平等・発展・平和に向けての行動ですね。これが来年の北京会議のテーマです。

最近盛んに使われ、北京会議でも脚光を浴びるだろうと思われる言葉はgender equalityという言葉だろうと思います。男女平等、性にとらわれない平等という意味でよく使われています。私が取材報道しました三つの世界婦人会議、それと来年の北京会議をキーワードにまとめまして、それを巡って時代の流れ、時の流れ、意識の流れをたどってみましたがいかがでございましたでしょうか。

これで私の話は終わって、ご質問、ご意見の時間に当たりたいと思います。



Q 1 新聞社内の女性運動について、どういう風になさって何が有効だったかを教えてください。

深尾 よくぞ聞いて下さいました。とにかく女性記者の扱いについて怒り狂ってたわけですが、ただ、怒って男性を敵に回しては元も子もないことはわかっていました。その頃私はアメリカの女性運動の取材にほとんど毎年行っていました。アメリカの女性たちの行動を取材してみると、日本の女性と違うところは非常に自己主張が強いことですね。黙ってはいないわけです。アメリカの女性記者なら編集長のところへいって、「私はこんなに才能があつて、記事も上手で男性にひけを取らない。なぜ給料をもっと上げてくれないか、なぜ昇格させてくれないのか」と自分を主張する。アメリカの文化の中では主張しない人は能力がないとみられてしまうんですね。

しかし日本の社会や企業ではこれは通用しませんね。当時、女性記者のトップの地位にいたのは私の三年先輩の金森トシエさんで、婦人部の主任という肩書きでした。私はまだ何の肩書きもないヒラの記者でした。

金森さんはとても優秀で才能のある人にもかかわらず主任で、年も若くて婦人問題のことなど何もわからない男性がよその部からやってきて、次長のポストに座り、「えー、皆様、今度何々部からやってきまして、婦人部の次長になりました。今まで婦人面なんか読んだことありませんし、婦人問題なんか何もわかりませんが、ま、よろしく頼みますわ」というようなことをぬけぬけと言う。



私たちは「婦人面も読んだことのない、何もわからないで、よく言うよ!」と、もう悔しくて悔しくてたまりませんでした。

アメリカの女性だったら黙っていないだろうな、部長のところに行つて「どうしてあんな人が次長になるんですか」と血相変えて詰め寄るだろうと思ひました。でも日本でははつきり「あんな次長は私たちの上司として付き合えません」と言つたら喧嘩になつてしまいます。でも黙つていたら事態は何も変わらないだろうと思ひました。

そこでアメリカ的自己主張と、日本的な長幼の序の美德みたいなものを組み合わせた方がいいのではないかと考えつき、数少ない女性記者がまとまつて上司のところへ行つて「金森さんを次長にしてください」とお願いすることにしたのです。日本の風習では、アメリカ風の自己主張は通用しないでしょうけれど、先輩を昇格させて下さいとお願いするのは決して悪いことではないでしょう。

そこで編集局長のところへ行きまして「どうか金森さんを次長にしてください」とお願いしたのです。

新聞社の次長というのはいわゆるデスクと呼ばれて、部下の原稿を見たり、手を入れたり、企画を立てたりする中心人物で、そのポストに女性である金森さんに是非就いてもらいたかつた。そうでないと女性全体の地位が上がらないのです。

「そうして下さつたら、私たち若手の女性記者も張り合いを感じてますますいい記事を書きます。だから婦人面はもつと良くなると思うんです」と、にこやかにお願いしたものです。

編集局長は最初は「え?」しかし女性がデスクになつて男性を部下に使えるかね」とか言つ

\*\*\*\*\*

ていました。

でもそのころ高橋展子さんがデンマーク大使になつたり、高島屋の重役に石原一子さんがなつたり、と徐々にではありますが「女性初のナニナニ」という人たちが少しずつ誕生して世の中の流れが徐々に変わってきました。新聞社の幹部もさすがにそれに気づいたのでしょうか。金森さんは一九七八年、婦人部次長になり、それにつれて私が主任になりました。その後金森さんは婦人部長に昇格したのです。

女性同士のネットワーク、結束が大切だと思つて思いました。

また、その頃は講演に行くとき女性の読者の皆さんによく頼みました。「新聞社には女性記者は十人もいません。女性の視点から読んで、おかしい、変だ、と思う記事があつたらどんどん編集局長宛てに手紙を送ってください」とお願いをしたものです。

男性記者だけで新聞記事を作っているのは、バランスのとれた記事ができ上がらない、ということを経験した。新聞社の幹部に理解してもらうには、女性読者の力を借りる以外にないと思つたのです。読者たちからは「えーっ、そんなことしていいんですか」と質問があつたりしてかえつて驚きました。「皆さんは新聞の消費者でしょう。消費者運動の視点を持ち込んでくださいよ。男性ばかりで作っている新聞は明らかに欠陥商品ですよ」などと過激な答えをしたりしたものです。

それから社説を書く論説委員に女性がいなかったので、おかしい視点の社説がときどき出ました。そんなとき金森さんと私で、論説委員室を訪れて話し合いのミーティングを持つたりしました。できる限りニコヤカにね。「女性に理解のあるいい男たちを招待する会」というお茶の会をし





たり、女性記者たちが集まって「社長を食事に呼ぶ会」なんかもしました。もう怖いもの知らずですね。

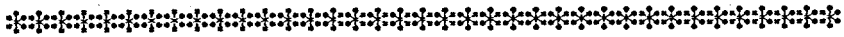
金森さんと私が廊下を歩いていると、向こうから論説委員がやってきて「おお、おつかない、おつかない」（笑）と、言われたりしました。それに対して「女性是要するに可愛いかな、おつかないの二種類しかないなんて、ボキヤブラリが貧弱ねえ」と、ニツコリしながら皮肉を言ったりして。ゲリラ戦術を展開したわけですね。

Q2 ジェンダーとセックスの違いは？

深尾 日本語に訳すとジェンダーもセックスも性、性別になって、はつきりと説明するのはむずかしいですね。

参加者 セックスというのは男と女、つまり性器の違い、セクシャリティーはジェンダーから由来して、社会的、宗教的、経済的に影響される男らしさ、女らしさから来る差別、英語では三種類の解釈があるから日本語には訳しにくいと思います。

たとえば女の子はブスだと困るけど、男の子は顔じやないとか、宗教的にも女が差別される風潮とか習慣とか、経済的には男は基幹労働、女は補助的業務とかいうのが、ジェンダーではないでしょうか。



深尾 一口に定義するのは難しいですね。これからジェンダーということばはあちこち出てくるでしょう。二一世紀はジェンダー革命の時代と言われています。これからの問題でしょう。

Q3 女性差別的記事に対して苦情を送るということに関して、記事そのものより扱い方の問題になりますが、保護者の名前が父親しか出ませんね。そのことを新聞社の方に言うと、「おかしいと思っているが、全くの慣行でしかない。警察の記者発表が父親の名前しかない以上、母親の名前まで調べることはできないので、父親の名前が表面に出てくる」ということなんです。本当かどうか……。外国ではどうなんでしょう。

深尾 そう言えばアメリカでは「だれだれ夫妻の息子」と、夫婦の名前を出す新聞も多いですね。新聞といつてもアメリカはたくさんありますからいろいろですけど。日本の新聞はまだ世帯主イコール男、保護者イコール父親という感覚に支配されているのです。いろいろな事件は記者クラブを通じて発表されますが、警察というのがまた男性優位主義の塊みたいところですから、それがそのまま新聞に反映されてしまうのです。

しかし読者には新聞を変える力があると思います。読者にお金を払っていただいてこそ新聞があるのですから。

Q4 市の予算が出るとき、女性関係の予算が「社会福祉費」から出ているんですね。すごく憤慨して、新聞に出したり、総理府の坂東さんに申し上げたりしているんですが。私、宇都宮



に住んでいるので行政の方に申し上げたら「来年から直せるところは直します」と、おっしゃってくださって「婦人青少年費」に項が上がったんです。

いろいろな問題をやつても、男性社会の中で原点のところを直せないということを頭に入れておいてもらいたいと思います。

**深尾** 大きな問題、中くらいの問題、小さな問題と、あらゆるレベルの問題に対してゲリラ的に同時に目配りしてゆくことが必要でしょう。身の回りの小さなことに目をつぶってはいけませんね。おかしいと思ったら何かアクションに訴えることでしょね。

福祉の話ですが、県によつては福祉局の下に女性青少年課とかがあるのですね。女性問題が福祉局の下にある、これはおかしいですよ。「おかしい」と住民が声を挙げていくしかないですね。

**Q5** 北京会議の後も世界婦人会議は開かれるのでしょうか。

**深尾** とりあえず、北京会議をやつてからのことではないでしょうか。それでもつと必要だということになれば、五年後も、十年後も開かれるでしょう。

**Q6** さつきの話のように男性が婦人面を読んでいないとすれば、婦人面に詳しく報道されても男性にどれだけ伝わっていくのか。猫とネズミの話し合いにネズミだけで話し合っているよ

うな状況ではないでしょうか。

深尾 きょうお配りした私の執筆記事でもおわかりのように、世界婦人会議の様子は、新聞の第一面や社会面と、婦人面以外のページにも広く報道されました。

また一九七五年以降、女性問題の講演会に日本でも少しずつ男性が、それも高齢者が増えていきます。日本の場合、女性問題と高齢者問題がなймаぜになつてきていますね。

アメリカでもかつては生涯学習問題に関心を示すのは女性ばかりだったんですが、だんだん男性が増えてきて、現在、大学の生涯学習学級などは男女がほぼ半々になつている実情がありますから、日本もだんだんそうなつていくでしょう。でもどれくらいかかるかな。百年単位かな。

ところで世界婦人会議ですが、そんな会議はもう必要がなくなるというのが理想なのでしょうね。

(ふかおときこ 埼玉短期大学教授 茨城県立婦人教育会館館長 元・読売新聞編集委員)

司会(斎藤) ありがとうございました、深尾さんに、本当にいいお話をいただいて、私もこの二十年間のことを思い出しました。

前回は私が非常に雑駁な話をしましたが、深尾さんがきめ細かく拾つてくださつて、皆さんも理解を深められたと思います。次回は松井やよりさんに「激動するアジアと女性たち」という題でお話いただきます。ご期待ください。

# 北京会議参加への道——Q&A

全国各地から、毎日のようにいろんな問い合わせがきます。そのいくつかを誌上でご紹介します。

Q ワークショップを開きたいのですが、そもそもワークショップというとはの意味がわかりません。

work shopとは、もともと「作業場」の意味ですが、転じて「作業部会」——「研究討論の場」という意味で使われるようになりました。メキシコ会議の頃は「作業部会」という訳が使われており、細かく討論をつめたいときは、いろいろなワークショップに分かれて討論していました。

NGOフォーラムでワークショップという時には、日本の集会の「分科会」ということは皆さんが思い浮かべるイメージとしては一番ふさわしいかもしれません。しかし、日本の集会の分科会と違うところは、「参加者が、受け身でなく積極的にかわる研究集会」だということです。講師が一方的に教えるのではなく、参加者も積極的に発言し、テーマを深

めていく話し合いの場です。通常、何人かが問題提起して、それを基にみんな考えて意見を述べ合うことが多いようです。ワークショップには「先生」もいなければ、単なる「傍聴者」もいません。参加者のすべてが、自分の意見や体験を提供して議論を深めることが原則で、「私は何もわかりませんの」などという日本の謙遜は理解されないでしょう（極論すれば、そういう人は参加資格がないということになります）。

Q そうすると、フツの女は参加できないのでしょうか。

「フツの女」とは何を意味しておられるのかわかりませんが、学歴も職歴も関係しません。そのテーマに「関心があること」「問題意識があること」が大切です。

そうかといつて、「何もわからないから参加できない」と遠慮することはありません。そこから何かを学び、何かを発見し、新しい何かを創造しようという意欲のある方なら、積極的に参加なさることをおすすめします。長い間ばくせんと考えていたことが、いろいろな人の意見のやりとりを聞くうちに、突然ハッと気がつくことも多いものです。その時あなたは「わかった」「参加した」ことになるのではないのでしょうか。

「私は北京会議に行きました」ということだけを勲章にしたい方は、ワークショップはもちろん、会議への参加の席を、もっと熱心な方にゆずってほしいと思います。

Q 北京には行けないのですが、参加する方法はありますか。

もちろんあります。たとえば友人があるワークショップに参加するのなら、ご自分の意見を、あらかじめ友人に伝え、現地で発表してもらいます。会場の参加者の反応、みんなの討論の中から生まれたものなどを、録音テープにでもとっておいてもらえば、あなたも十分参加したことになるでしょう。

Q ワークショップでは何語が使われますか。

何語を使ってもかまいません。もちろん日本語でもいいのですが、日本語だけでは外国の方には通じません。世界で一番使用人口の多い共通語は英語ですから、英語の通訳をつけるのが便利でしょう。しかし今度は中国で開かれますので、テーマによっては中国語の通訳をつけたほうがいいものもあるのではないのでしょうか。

Q 〈あごろ〉では今まで何語でなさいましたか。

メキシコとコペンハーゲンでは英語で開きましたが、そうすると、ある程度英語力のある人でないと問題提起者になれないことを反省しました。それでナイロビでは全部日本語で問題提起し、英語で逐語訳をつけました。このため、郵便局やスーパーなどの労働現場にいる人も気軽に問題提起でき、臨場感のある発言ができたように思います。ほかのグループの日本人の参加者に、〈あごろ〉のワークショップは自分たちもよく理解できてよかったと、お礼を言われたりしました。

今度は、英語と中国語の通訳をつけるつもりです。

Q 通訳はどこにお頼みになりましたか。

自分たちの仲間に頼みました。日本人、または米国人が通訳を手伝いましたが、最初の問題提起の文章は、あらかじめ日本語を渡して、訳についても打ち合わせておきました。

Q 同時通訳はつけてもらえないのですか。

今まではNGOでは同時通訳はありませんでした。今度の北京も、問い合わせた結果では、できないということです。ど

うしても同時通訳を……と思うなら、日本から同時通訳の機械とベテランの同時通訳者を用意して行かなければならないでしょう。

Q 英語と中国語の通訳を一度にできるのですか。

英語を聞きたい人の席と、中国語を聞きたい人の席を、あらかじめ分けておけば、同じ時間帯でそれぞれの訳語を逐語訳で話すことができます。

Q どういうテーマが喜ばれますか。

国際会議ですから、まず国際的な話題であることが第一条件です。たとえば労働なら、日本の女性労働の現状だけを語るのではなく、そういう現状はどういう理由によって生じたのか、それは他国にどういう影響を及ぼしているのか、といった分析や、他国ではどんな状況で、それに対してどんな努力を払っているのか、といった問いかけをすることが大切だと思います。自分たちのグループのPRだけを長々とすることは一番嫌われます。

Q どういう反応がありますか。

外国の人びとは率直ですから疑問はビシビシ問いかけてきます。たとえばコペンハーゲンの時、私たちは「高度工業化社会の中の日本の女性——その光と影」というワークショップを開きましたが、質問の部で真つ先にインドネシアの女性から、「日本の女性の状況がそんなにも悪いのは、日本の主婦が「悪い男」を再生産しているからではないか。インドネシア在住の日本企業の家を見ていると、妻は夫と男の子にはかしく、女の子はお手伝いさんになっている。責任の大半はあなた方自身にある」と、非常に厳しい指摘を受けました。

これからは、「そういう状況を、私たちはこういうやり方でこういうふうに変えた」という報告がきちんとできるのでなければならぬでしょう。ワークショップを開くということは、私たち自身の「いま」が、世界の人びとに問われることです。慰安婦問題なども当然大きなテーマになると思いますが、八月までに私たちがきちんと運動をして、日本政府による謝罪と、日本政府による個人補償を獲得しておかなければ、アジアの人びとに合わせる顔はないと思います。

# 女性アナウンサーの“常識”

## 山根基世

(NHKアナウンス室)

NHKの女性アナウンサーは現在四十七人、そのうちこの春入局した四人は、全員地方に赴任していった。これで東京アナウンス室にいる女性より、鹿児島から札幌までの地方局の女性のほうが多くなった。

私がNHKに入った二十三年前から、男女雇用機会均等法施行までの十五年間、女性アナの採用は毎年大体一、二名。全体数二十人前後のほぼ全員が東京アナウンス室に所属し、例外的に大阪、名古屋に転勤することはあつても、二、三年で必ず東京に戻るといのが、NHK女性アナウンサーの「常識」だつた。その「常識」が次第に覆され始め、私たちは今、新しい大きな可能性とそれに伴う大いなる悩みに直面している。

アナウンサー全体の数が五六〇人から五三〇人へと削減される中で、女性の数が倍増することによつて、全体に占める女性の比率が大きくなつた。まだまだ数の上で均等とはいかないが、宿泊勤務や転勤など、これまでは男性が引きうけてきた仕事上の責任を女性も分担しなければ組織がなりゆかない状況が生まれ、私たちもその中に組みこまれるようになった。

NHK男性アナウンサーの異動の激しさはつとに有名である。各地を転勤する中で学ぶことも多く、転勤は一つのチャンスと捉えることもできる。しかし、男性より重い家庭責任を負わされがちな女性が、本当に男性並みの転勤をしながら仕事を続けていくことができるのか。結婚、出産、育児、夫の転勤、親の介護、こうした私生活と仕事上の組織の責任と、どう折りあいをつけていくのか。この先を考えれば溜め息が出る。

一方、多メディア多チャンネルへと放送をとりまく状況が変化している今、私たちの仕事内容も変わってきている。「読む」ことはいうまでもなくアナウンサーの基本ではあるが、それ以上に、ジャーナリストとしての時代感覚を持ちながら番組をとりしきっていく実力が求められている。そんな、時代の要請に応えられる人材を育てるためには、アナウ



ンサーも若いうちに画面の裏側で汗や泥にまみれながら取材、提案、構成など番組作りの体験を重ね、番組の何たるか、放送の何たるかを自分の頭で考える必要がある。

バッチリお化粧して、キレイなおペベを着て、ギンギンのライトを浴びてディレクターの書いた台本通り、カメラに向かってニツコリお話しするだけしか経験しないアナウンサーが、十年経った時どうなるかは目に見えている。若くてかわいい女性は今毎年新しく入ってくる。女性も定年まで働くのが当たり前の時代、私たちには、若さを失ったあとも勝負できる実力を身につけるための、気長な育成の場が是非とも必要なのである。

ところがこれが難しい。私たち自身の意識の中にも問題がないとはいえないが、それ以上周囲の「女性アナウンサー」に対する意識に悩まされるのである。「どうせテレビで見るなら、若くて美人がいいなあ」といった典型的意見は今も変わらない。だから「せっかく若くて輝いている時、テレビに出ないで裏方やるなんて勿体ない。そんなことしている間にすぐおばさんになっちゃうよ」「アナウンサーが番組作って何になるの、ちゃんと読めなきゃしょうがないじゃない」となる。あげく、アメリカに一年間留学する女性をつかまえて「アナウンサーがそんなことして、何か役にたつの？」ときくことになる。

NHK女性アナウンサーの置かれた状況はまさに、日本の女性の置かれた状況そのものといえる。この激動の時代にわれわれは相も変わらず古くて新しい悩みの中にいる。この状況を変えるには、世の中全体の意識を変えていくことから始めなければならない。何と遙かな道だろう――。

それでも、私たちは、一人ひとりが人間として大きく成長すること、そのことが必ず、良い放送を出すことにつながっていると信じるほかない。そして一つひとつの実績によって道を切り拓いていくしかない。

~~~~~

従来からあるもの、枠組みや価値観や規範といったものに違和感を持ち、窮屈を感じる時、自分の感じる実感をこまかさず見極めたいと思えば、キチンとそれを対象化し、それと正面から向き合う必要がある。

自分が自然体でいられない窮屈の実体を、とりあえず仮想敵とみなし、対抗的に切り結ばなければ、相手はいつまでたっても、霧のようなあいまいさの中から浮かび上がってこない。あいまいなものは、いつまでたってもあいまいなままである。

そういうあいまいさへの敵意や反発に、つい肩がいかり、ルサンチマンをためこむ世代。それをカウンター・ジェネレーション（私の勝手な造語）とでも呼べば、次の世代は、もっと、自由に現実処理をし、「嫌なことは嫌」「私は私」とルサンチマンをため込まない世代かもしれない。もっと自然なびやかさを持って進化した第二世代を、オールタナティブ・ジェネレーションとでも呼ぶことにしようか。

もう一つ、これもカウンターなのだと耳に残ったことがある。昨年末のビッグニュース、大江健三郎氏のノーベル文学賞受賞。その授賞理由のスピーチで「万延元年のフットボール」にくわしく触れ、あら筋を紹介しつつ、大江文学全体の魅力を語る。主人公の兄弟二人——物語りの語り部たる兄蜜三郎と、過激派活動家で殉死を夢みる弟の鷹四。

スピーチは、「違った時間軸で起きる一連の出来事を、悲劇的なクライマックスまで的確に運んでいく」と「大江の語りのうまさ」を賞めながら、この谷間の村にダンテを住まわせてみるという夢を実現すべく蜜の造り出したカウンター・フィギュアが、弟の鷹なのだと説明する。

もともとこの二人は、一人の人間では表現し切れない人の心の内面を対照的な二人の人物を配して物語のワクをこしらえているわけだから、互いが互いのカウンター・フィギュアだとも言える。ある意味では、ドラマやフィクションに登場するすべての人物は、作者が自分の中の何かを、主題に合わせて増幅したり縮小したりして創り上げた、作家自身のカウンター・フィギュアとも言えそうだ。

## カウンター (counter)

奥川 睦

オールタナティブ (203号) について考えていて、もう一つ浮かんできた言葉がある。ヴェトナム反戦などに燃えたヒッピー文化を、従来の慣習的 (conventional) なものとの対比で、カウンター・カルチャー (counter culture 「対抗文化」) と呼んでいたのを思い出したのだ。

ボクシングで使う、カウンター・パンチというのものもある。これを広辞苑で確認してみると、「カウンター・ブローに同じ。拳闘で、相手から見舞われた突きをはずし、急に打撃を加えること」とある。

改めて英英辞典でcounterを引くと、動詞としてmeet an attack (with a return attack) があり、「迎撃する」「カウンターをくらわせる」くらいの訳語があたりそう。要するに、相手のパンチをかわし、かわされてくずれたバランスに乗り、相手の虚を突いてこちらからのパンチを見舞う、という感じだろうか。

ボクシングから離れ、「～に逆らう」(oppose) もあり、I countered their proposal with my own. (彼らの提案に対し対抗案として私自身の案を持ち出した) の例文が挙げられている。

接頭語としてのcounterは「敵対、報復、反、逆、副」の意で、自由に動詞・名詞・形容詞・副詞につけて組み合わせ自由。

○counter act ～に逆らう；(反作用で) 中和する。その名詞形がcounter action

○counter attack 反撃(する)

○counter balance 平衡力・釣り合わせる。

○counter check 対抗手段(をとる)

○counter claim 反訴(する)

のように枚挙にいとまがない。

“女性にとって「性の解放」とは何か”(『ジュリスト』総合特集) という論文の中で、平安女学院勤務当時の上野千鶴子氏は、ゲイ解放運動に触れて、

異性愛への敵意や反発からゲイまたはレズビアンとして自己形成した人々を、「対抗ゲイ・対抗レズビアン」と呼ぶとすれば、いわば「自然派ゲイ・自然派レズビアン」とも言うべき第二世代が育ちつつある。

と述べ、両者の違い、発生の由来等を、例の如く、鋭く適確な分析で説明されている。

# ペルーの女は立ち上がった 9

## 第四章 農業改革と村の女・山の女 (1)

キヤロル アンドレアス  
訳 サンデイ サカモト

地方からチンボテへ人々がなぜ移住したか論ずるときに、町の危機はペルーの農業システムの危機に関係しているということを忘れるわけにはいかない。この時代の農業システムは、植民地時代の産物であるが、過去数十年間に状況は悪化した。ペラスコ政府によって改革が大々的に行われた場所、特に沿岸沿いでは、生産は上がったが、そこに住む人々の生活を楽にすることはなかった。結果的に農地改革によって、女性も家でもコミュニティでも力を失った。女性たちは、近代化された共同農業の賃金農作業から外されていた。このようにして、一九六〇年代後半に農業改革は始まったが、地方の革命活動の成長をとめることはできなかった。

封建社会の下での生活はともきびしく、女性は働きすぎで、肉体的にも性的にも地主に虐待されていた。時には、彼女たちは「特権的な仕事」と考えられていた大地主の家の料理、掃除、子ども世話、家畜の世話、庭仕事などの仕事を与えられることもあった。また女性たちは、畑で落ち葉拾いをすることが許されていて、田植えや収穫の時期には日雇い人として雇われたりもした。そ

して女性たちは、家族に与えられた土地やコミュニティの土地を、男たちと一緒に耕した。女性はまだ家畜の世話や子どもの教育を責任を持っていた。しかし最も重要なのは、男と女が抑圧的な地主システムと一緒に反対していたということだ。

## “開発”で固定化された性別役割

農地改革の導入で、男たちは国家に管理された協同組合の組合員になった。一方、離婚したり寡婦になったりした女性だけが協同組合の組合員になることができた。たとえ協同組合に契約労働者として雇われたとしても、女たちには発言権はなかった。そしてこのような契約労働者は未熟練労働者として、安い賃金を受け取ることしかできなかった。しかし、若い男たちは、機械化された農業生産に必要な技術を学ぶために学校に行くよう奨励された。このようにして、男たちは農業生産における決定権を握ると、家での権力をも握るようになった。また沿岸地域では、女性たちは家事以外の仕事はできなくなった。このようにして、女性たちは生活のために男たちに頼るようになるを得なくなっていた。そして、畑で働く男たちに弁当を持つていくのが当たり前となった。

政治改革のもとで、女性たちが受けた技術的教育は、家の外で働くのには十分ではなかった。女性たちが学んだ技術とは、家で家族のための縫い物をするために教えられたミシンの使い方ぐらいであった。その結果、女たちは、社会的な力の源である社会活動から遠ざかざるを得なくなった。こうして女性に利益を与えるはずの改革は、女たちを男たちから孤立させた。そして男女平等を押し進めるはずだった社会的経済的資源も、女たちの手には届かないものとなった。実際、伝統的に

多くの男性は縫い物をし、織り師や仕立て屋としてお金を稼いできたが、農業改革によつて、縫物は主婦的な仕事（給料なしで女性がやるものときめつけられていた）になつてしまつた。その結果、今までより以上に、女性は家に閉じ込められることになつた。このような過程がもつとも早かつた沿岸沿いの地域では、女性の文盲率が非常に上がった。

土地改革を推し進めるために、地方に送られた政府役人たちが、「開発」を推し進めることによつて、女性の権利が喪失されていくことに気がつくことはなかつた。また男性組合員や農業組合リーダーも同様に無頓着であつた。さらに、女性はコミユニティの出来事に以前ほど関与していなかつたため、組合リーダーは女性が問題提起をしてもいつさい取り上げなかつた。土地改革の最初の頃、私が訪問したある沿岸沿いの農業コミユニティでは、そこで統計をとつていた女性公務員が勧めたのがきっかけで、女性たちは一年間読み書きの授業に参加していた。しかし、協同組合の男性理事たちは「女性は家庭の仕事を怠っている」として読み書きの授業を禁止した。そのため、ある女性がこの問題を農業協同組合に持ち込んだが、この女性は組合から追い出されたという。地方の女性たちによると、これは特別なケースではなかつたという。

## 拡大した多国籍企業の支配

チンボテを囲むサンタバーレイでは、土地改革をめぐり農業労働者と政府は永遠の対決に追い込まれるという事態に陥つた。そのような状況によつて、女性はコミユニティの生活に再び参加しやすくなつた。地方の農家の問題は、肥料、農薬、機械、種苗の値段の高騰、高い利息、農産物の値

下がり、農業生産の機械化を進めるためにかかる費用などである。中央政府は組合構造を責め、協同組合の再構築を強調したが、農業労働者はこれを協同組合の分断、廃止、個人所有への復帰、多国籍企業による支配を導くものであると解釈した。

地方の人々は「現状では自分たち自身の給料から、学校、クリニック、その他のサービスの費用を出すことが当たり前となっているが、法律的には政府に責任があるはずだ」と訴えた。政府は、農民が地主から奪い返した土地の補償として、地主にお金を払い続けるよう主張した。農民たちは土地は初めから農民のものであり、これほど耐えがたい重荷はないと感じていた。

サンタバーレイの幾つかのケースでは、協同組合メンバーは政府へ綿を売ったが、半年から一年間費用が払われることはなかった。彼らが執拗に抗議した結果、費用が支払われた。しかし政府が、農産物の売買を管理する関係で賄賂に関与したということで告訴されたとき、政府は協同組合を再び民営化すると脅しをかけた。民営化は、結果的には多国籍企業が新しい地主となる地主システムの回復を意味した。またそれは女たちが訴えていた共同体構造の中ででの平等を実現する可能性をなくし、家事奴隷から解放されることもできなくなることを意味した。

実際、大農場の隷属関係に戻ることはまったく女性のためにならない。また男に私的隷属する関係を強調することも女たちのためにならない。民営化は特に女性には損失が大きい。というのは彼女たちは協同組合の正式なメンバーではないので、組合がなくなつた時には少しの土地ももらえないからである。季節労働者や契約労働者は土地分配の時には完全に追い出される。たとえ、もし、ほんのわずかな土地をもらつたとしても家族を養うことはできないし、農村から都市へ移動する膨大な移民の問題も解決されない。

## 進歩的勢力と結びついた女たち

サンタバーレイの女性は一九八一年以来、女たちの会合を開いていた。そこで、経済危機がどのようにに彼女たちに影響したかということ、そして、このような経済危機に立ち向かうために、どのようにに自分たちを有効に組織できるかを議論した。試験的に、ある女性によつて共同保育や野菜畑活動が企画された。地方の女性によつて行われたこのような組織活動は、男女が一緒にしていた抗議行動を妨害せずに済んだ。

チンボテ地域の協同農場リンコナダで行われた二四時間スト（労働阻止）は、地方のストへと引き継がれ、後にこれは農業労働組合によつて組織された全国規模のストへと広がった。リンコナダの最初の抗議は、未払い賃金を要求することと一五〇〇人の契約労働者を失業に追い込むおそれのある農地分配に反対することであつた。女性たち自身の証言によると、このような抗議行動が成功したのは部分的には地方の女性組織ができたためであるかもしれないという。

リンコナダの状況は、地方と都市からの労働者を統一した多くのケースの一つである。チンボテでは、教区民の社会的闘争にも反映しているカソリック教会社会正義委員会の参加によつて、両方の地域からきていた労働者の団結力が増強された（注45）。この闘争によつて、教会は貧しい者と政府の間の仲介役を引き受けざるを得なくなった。一九八一年、チンボテのカソリック教会のリーダーが、政府による政治犯の組織的拷問を公に批判した。また活動家が政府に弾圧されたり、教会内でも弾圧があつたとき、「国の良心」として公の地位から退く者も出てきた。九人の神父がその地

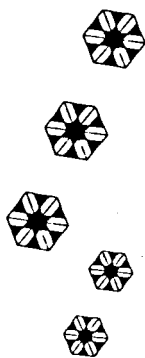


域から移転させられた。しかし、教会のリーダーは、政府に貧しい者の要求を明確に示し続けた。

一九八二年三月八日、教会の社会正義委員会は、地方の文化委員会、組合、フェミニストグループと一緒に、チンボテで国際女性デーの祝いを組織した。フェミニストたちは、初めて、地方政府、教会、組合、野党などのすべての進歩的グループ、そして、チンボテと周辺の地域の貧しい女性の問題に焦点を当てているグループに、この国際女性デーに参加するよう訴えた。大衆闘争において、女性の指導力や政治綱領（プログラム）を革命的に変えるという女性の要求が認められ、合法化されたのも、ひとえに草の根レベルで女性は何十年も活動してきたからだ。女性の闘いはまだ始まったばかりだが、ついに女性は、男性と同様に歴史の創造者になったと言えるのかもしれない。

〔注〕

45 ペルーの神父である Gustavo Gutierrez によつて明瞭に討議された解放論を支持するキリスト教の「ベース コミュニティ」の発展と影響は、この本では分析されていない。ほとんどの教会のリーダーが左翼の党と関係を断ち切るようにローマから圧力をかけられ屈服したため、一九八〇年までには革命を推進するような教会はほとんど見られなくなった。



# 女ひとりドケチ旅 4

辻 みゆき

## トルファン

ウルムチの宿屋を出たのはまだ外が真つ暗なうちだった。おばちゃんたちはまだぐっすり眠っていた。

おばちゃんたちに挨拶もせず、こっそり出ていくように悪い気もしたのだが、正直いつて部屋を出てほつとした。

外は真つ暗だが、バスも動いているし、人々は働き出している。もう六時なのだ。

北半球で夏、六時にまだ真つ暗というのはおかしいと思われるだろうが、そもそも時刻というのは人が決めたものだ。北京よりずっと西側にあるというのに、ここでは強引に「北京時間」が使われている。明るくなれば起きる、暗くなれば寝る、という自然な生活のリズムも、権力の力でねじ曲げられている。

長距離バスの駅で切符を買う行列に並んでいると、真つ黒に日焼けした生成りの短パンをはいた、ジャングルに探検でも行きそうな出で立ちの日本人らしき男の子がいた。

聞くと、やはり日本人で、彼もオアシスの街をまわった後パキスタンに抜けるという。バスを待つ間、一緒に揚げパンのようなものを食べながら、日本で何してる、という話になった。

驚いたことにずいぶん近所に住んでいるらしい。私の下宿と彼の寮はたかが三百メートルしか離れていないところにあるようだ。しかも私の高校時代の同級生の友人らしい。世間は狭いものだ。

パキスタンへのバスの出発地、カシュガルで会おうということになった。泊まる宿は目安がついていたので、そこで何日か後に会うことになった。

トルファン……。NHK「シルクロード」で何度この名を聞いたことか。この名の響きはマスケットの透明な実を連想させる。そして薄い絹の衣をまとった頬の赤い乙女を。

ウルムチからトルファンへは半日ほど。辺りはもうすっかりステップの草原だ。羊が歩いている姿など見ると、ああシルクロードに來たんだなあという嬉しさが心の底から湧いてくる。天気は快晴。抜けるような空だ。

以前は淡い憧れにすぎなかった場所が目の前に広がっているというのは、ものすごく幸せな気分にしてくれる。四方八方に山が見えて、雄大な草原など北海道を除いてどこにもない日本、しかもその中の盆地で育った私は常に地平線に憧れていた。山や高い建物に挟まれて本当に遠い所を見渡せないから日本人は考えが狭くなるのだ、と思っていた。真に広大な所へ出て、地平線まで続く大地を見渡せば世界観が変わると信じていた。そのために北海道まで夜行など乗り継いで行つたことがあるが、残念ながら地平線は見られなかった。

初めて地平線を見たのはヨルダンだった。本物の砂漠が広がっていた。地平線に落ちていく太陽がばかに大きかった。こんなに大きな太陽は砂漠でしか見られない。

トルファンに着くと、バスを降りた途端に、なんと日本語で「こつちこつち」という声がした。十四、五歳の少年が私のほうに向かって手を振っている。どうやら宿屋の客引きらしい。聞くと、ちようど泊まろうと思っていた所だったので少年について行つた。

いま着いたばかりらしい日本人、アメリカ人観光客と一緒に軽トラに乗つてその宿へと向かう。それにしてもがっかりだ。少年が日本語を話すということは、それほど日本人観光客が多いということだ。「秘境」とはいわなくても、せめて日本人観光客に毒されていないで欲しかった。

しかし道中、私はすつかり嬉しくなつた。本当にここは私のイメージしていたシルクロードの街なのだ。緑の葡萄棚の下を通り抜けた時には狂喜してしまつた。

宿は白壁のかなり大きな平屋で、中庭で客が洗濯したり日光浴したりしていた。

私のはいつた部屋には日本人の女の子二人と男の子一人がすでにいた。女の子のうち一人は下痢がひどいそうで、ここ何日間か宿を一步も出ていないという。水が合わないせい、食物が日本ほど殺菌されていないせい、日本人観光客でこの辺りでおなかをこわす人が多いという。まだ便秘の気があつた私はちよつとうらやましくなつたが、わざわざ観光にきて何日も部屋と厠の往復で過ごさなければならぬなら便秘のほうがよつぽどまだ。

便秘のためには繊維を取らねばならない。繊維を取るには野菜を食べねばならない。

同室の男の子がちようど昼飯に行こうと思つていたところだと言うので、一緒に出かけた。

その小さな食堂は漢民族がやっているらしく、中華料理屋だつた。旅中「忘れ得ぬ美味」というのはいくつあつたが、ここの肉野菜炒めもその一つだつた。

玉葱、人参、インゲンなどの野菜が牛肉と共にびりつと唐辛子の効いたソースで炒められている。

野菜はまだしゃきつとしているが、それでいてちゃんとソースの味が染みている。味もさることながら、安くて大きなお皿に大盛りというのが嬉しかった。もしかしたらあれは一人分ではなくてみんなで一緒に食べるようになっていたのかもしれないが、飢えていたのでぺろりと平らげた。

## 穴

さておながが落ち着くと次は観光だ。さっきの少年が観光案内業も開いているようだ。さつそく私のところに商売をしにやって来た。遺跡、古城へ行くのに車が出ているという。もともと歴史的建造物や、いわゆる名所、史跡に興味がなく、普通の家や、人を見てまわるほうがずっと好きなのだが、ともかく車に乗って行けばいろいろ見られそうだったのでその車に乗っていくことにした。車に居合わせた人たちは、バレーボールの選手だという二メートルはありそうな、髭面のいかついスウェーデン人二人、北京の学生だという中国人の女の子、会社員だという、しかしそうは見えなかった日本人男性一人。

車は荷台にひらひらしたカーテン付きの屋根がついた軽トラで、おんぼろながら持久力はあるそうだ。草原のど真ん中で立ち往生して歩いて帰らなければならないということにはなるまい。

淡い緑の林道を風に吹かれながら走って行く。中国人の彼女が歌を歌い出した。周りの風景にびつたりだ。そんなふうに自然に歌が口をついて出てくるなんてうらやましい。私なんて人がまわりにいるところではカラオケでしか歌えない。

しばらくいくと馬車が私たちを追い越していった。

たしか二千年以上も前のものらしいそのお城は、風化してほとんど砂と化していたが、やたら大きな城だったとみえて、行けども行けども廃虚が続いていた。太陽はガンガン照っている。暑くて暑くてふらふら歩いていると、突然目の前、足元にぼつくりと直径六十センチほどの穴が開いていてではないか。のぞき込んで見ると、はるか下の方に底らしきものが見える。思わず足の裏からぞくぞくとするものが上つてきた。

昔は井戸だったのだろうか。古城が全体に風化して平らになっているわりには、この穴はまだまだ深かった。草一本生えていない砂ばかりのこの土地にも、昔は掘れば水が出てきたのだろう。地球の砂漠化を物語っている。しかし昔はどうであれ、現在は正真正銘の落とし穴だ。周りに柵もなければ、警告の立て看板もない。観光コースを少し外れているようで観光客もほとんどいない。今だって、もし他の人と離れて歩いていて穴に落ちていたら、どうしようもなかっただろう。叫んだところで穴の底からでは聞こえないだろうし、自力で登ろうにも砂でずりずり滑るだけだろう。もう少しで廃虚で果てねばならないところだった。以後は足元に注意して歩いた。

## 旅は道連れ

その古城から少し離れた所に別の遺跡がある。こちらの方はそれほど朽ちておらず観光客でにぎわっていた。ラクダを連れた少年がいたので乗せてもらった。ラクダは二つのこぶの間に乗るものだと思っていたのだが、こぶの上に乗るものと初めて知った。高くて快適、気持ちいい。

ここの少年たちは十歳ぐらいまではみな丸坊主になっている。顔付きもその頃まではまんまるく、

本当にマルコメ味噌のマルちゃんのようなのだ。それがなぜか中学生ぐらいの年齢になると途端に変わってくるようなのだ。彫りが深くなり鼻が高くなってくる。目の色もやや薄くなっているのではないだろうか。そして年をとるにつれてこの傾向は強くなっていくようで、老人となるとまるでインドの哲人のようなのだ。

その後健脚のスウェーデン・ナショナルチームに連れられて、私たちひ弱な日本人旅行者と北京の乙女は、ふうふう言いながら砂丘を登ったり、さらなる古城に出かけたり、ミイラを見にいったりした。さすがスポーツ選手、彼らのタフさには驚いてしまった。普通ならみな乗り物に乗っていない距離でも、彼らは「ノー・プロブレム。レッツ・ゴー」という。そして歩き出したらまたこれが速い。コンパスの違いも大きく影響していただろうが、体力そのものがまるで違っていた。二日間彼らと行動を共にした私たち三人は、もうへとへとだった。

夜は宿の中庭で、みんなで水よりもコーラよりも安かった中国製ビールで乾杯し、気持ちのいいところでぐあつと寝た。

## 愛の表現

ある日、同じ宿に泊まっていた日本人の女の子が「私、眠れない……」と疲れ切った顔をしてやって来た。同室のヨーロッパ人カップルが昼も夜も、彼女が傍にいたいといまいと、ベッドでいちやつくといふ。

「いちやつくつて、キスするとか……？」

「ちがうちがう、もつとすごいの」

「ええ……」

私も衝撃を受けてしまった。犬や猫ではあるまいし、他人のいるところでそんなことするなんて……。東洋人だからつて軽く見てるんじゃないの。うずうずと怒りさえ湧いてきた。

四年前、ポーランドに初めて行つたとき、街角で堂々とキスしあったり、抱き合ったりしているカップルを見て、映画やテレビではそのような光景は見慣れているものの肉眼で目撃したことはなかった。ドキリとして思わず見とれてしまったものだが、それぐらいは見ていてまだしもさわやかだった。しかし、三年前のこれもポーランドだったが、友達どうして夕食を食べにいったとき、テーブルの向かい側に座っていたカップルが私たちの目の前で首筋にキスしたり、いちやいちやし始めたときは、私や他の人たちは目のやり場がなくて困ってしまった。カップルはちよつと人が振り向くような美男、美女だった。そして私たちがない見物人のほうは、ぱつとしない男性二人、女性一人の、甘い雰囲気など全く存在し得ない面々。カップルのほうは「世界は二人のもの」みたいなノリで、まさに傍若無人で接吻にいそしんでいたが、我々は目のやり場がないという不自由な思いをしていた。テーブルに真つ直ぐ座るとカップルを眺めるかたちになるので、関係のない方角を向き、肘をついてほとんどヤケクソのウォッカを飲むしかなかった。

それぐらいでさえ、慣れない身にはかなり「げげつ」という感じだったのに、同室でベッドの上シーツの中でいちやつかれたりしたらたまったものではなからう。私は全面的にその日本人の女子に同情し、一緒にその「無神経で動物的な」ヨーロッパ人に腹を立てた。

その後ヨーロッパへ進み、ヨーロッパに住むようになって、日本人から何度同じような苦情を聞



かされたことか。韓国人からも聞いた。

ヨーロッパ人はそういう事に関する感覚が東洋人と違うのか……。あるヨーロッパ人に尋ねると、そういう行ないはヨーロッパのオリジナルではない、アメリカからの輸入だと言われた。

アメリカ人も、もとをただせば多くはヨーロッパ人。どちらが先というのはわからないが、要するに西洋のものなのだろう。聞く限りでは東洋人が居合わせようと、同じヨーロッパ人が居合わせようと、何人が居合わせようと、関係ないらしい。自分たちは自分たち。愛情を表現するのに周りに遠慮することはない、というわけだ。

とはいってもそういう感覚にはなかなか慣れることができないものだ。こちらで結婚してからも、外で夫がちよつとおでこにキスするのさえもかえつてストレスになり、「おばちゃんが見てるからやめてよ。日本ではそんなことせーへんねん」といつて拒否していた。それが昨年日本に帰った時、京都三条河原で五メートルおきにずらりと並んだカッブルのうち、堂々と接吻していたカッブルが少なからずいたということは、日本文化の変遷を目近に見るようだった。

## イランの話

それにしてもイランはどんなだろう。イスラームの国、イランではまさかこんなことはないだろう。でも、代わりにもつと厳しいことにも出会うかもしれない。

ちようにその日本人の女の子がイランに行ったことがあるというので、様子を聞いてみた。

今はもう存在するらしいが、その頃はイラン旅行のガイドブックは一冊も出版されていなかった。

着いてからどうにかするといつても英語のツーリスト・インフォメーションなどあるとは思えない。しかもイスラーム原理主義の国。イスラームの法が国の法だ。なにか不始末をしでかすと「石投げの刑」に処されないともかぎらない。

彼女の言うには、女性が一人で歩くのも尋常のことではなく、一人で歩いている女は「身持ちの悪い」女と見なされる。そして「そういう類の女」には何をしてもよいと思われるのだそうだ。

また入国・出国審査の審査官にセクハラを受けることもあるとか。女性の身体検査をする場合でも男性の審査官が行うので、カーテンの中で触りたい放題だとか。

頭がくらつとした。セクハラの危険性を冒してイランに突入するか、パキスタンからトルコに飛んでしまうか……。ロマンを選ぶか安全を選ぶか……。

そんな危険を冒してわざわざ行くこともないような気もする。要するにポーランドが目的地なんだから……。しかしこの眼でそこへつづく道を見たい……。もしもという時のために父が作つてくれたパトカーのサイレンの鳴るポケット警報器があるが、それを当てにするか……。

やつぱり男はいい。この世にいくらホモ・セクシヤリストがたくさんいるといつても、やはり多いのはヘテロ・セクシヤリスト。しかも女性のヘテロ・セクシヤリストは男性を強姦したりしない。ということは男性にとつての危険性は女性の何分の一かだ。女が弱くて旅ができないのではない。男がその可能性を奪っているのだ。

イランに入るかどうか、気が重くなつてしまった。しかし今はいろいろ考えても仕方がない。パキスタンで考えることにした。「英語は一般に通じない」ということだったので「水をくれ」とか「便所はどこか」とか「飯をくれ」とか基本的ペルシヤ語を彼女から習つておくことにした。

## 阪神大震災の痛苦を 共に――

胸もつぶれる報道に全国の皆様深く心を痛めておられることと思います。

〈あこら〉メイも十六人の方が被災されました。いまだに消息不明の方もおられ、いても立つてもいられない気持ちです。

東京から大きなリュックを背負って駆けつけた人も、西宮どまりで先へ進めず、むなしく帰京しました。

二〇三号に記事を書かれた西宮の石井ふき子さんは、幸い建物の被災はまぬがれましたが、自らも被災者として、被災者の視点に立つ地域の救援活動が続けておられます。そのご苦勞を助けようと仲間たちのボランティア活動も始まりましたが、被災地の方々は、たとえ激しい被災はまぬがれても、停電、水不足、そしてご近所の方々の援助等々で、眠れぬ夜をお過ごしと思います。〈あこら〉運営会議では、被災地の方々からの会費は頂戴しないことにしました。また各地の拠点でカンパ活動が始まりましたので、それは一応〈あこら大阪〉の澤田和子さんの所にお送りして、一番必要なものを必要ところに送って頂くことにします。

この大震災は日本のあり方を考えるまたとない機会。私たちの生き方を反省しつつ、苦しみの万分之一でも共にしたいと思います。被災地の皆様、さぞ大変と思いますが、どうか何よりもおからだをお大切に。一陽来福の春をお祈りします。

### 〔カンパ送り先〕

澤田和子 〒533 大阪市東淀川区東淡路1-5-2-443 振替00920-0-50400  
あこら事務局 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4 振替00100-0-5264

看護婦



と



(21)

## 後藤登茂子さん (2)

増田れい子

後藤さんが、看護婦の道を選んだのにはいくつかの強い理由がある。

ひとつは母のすすめである。熊本県の米どころで有名な菊地で農業をいとなむ両親と姉と弟の家族。弟は無条件で進学させるが、女の登茂子さんを進学させるゆとりはなかった。

「手に職をつけてほしい」と母はいつた。

「でも、もうひとつ理由がその奥にはあつたんです。ホラ、私の顔にはこんなアザがあるでしょう。母はとつてもそのことを気にしていて、職業を持つようにと口グセのようだったのでした」

左の目の下にうつすらと青いかげのようなものがさしている。それは目立つほどのものではないが親には気になったのだろう。こどものときからカバーマークでかくすようにいわれてきたという。後藤さんは笑って「親は必死でねえ、こどもの私を熊本市の病院に通わせたものです」と話してくれたが、幼なくして「病院」を知り、看護婦さんの存在を知ったのが、この道に入るきっかけになったのも事実だ。

高校までは親の責任だといって、両親は登茂子さんに熊本信愛女学院の受験をすすめた。この学校には卒業すれば准看護婦になれる衛生看護科があった。合格。三年後卒業、すぐいまの病院に就職した。就職と同時に高看を目ざして看護専門学校（定時制）に三年間通った。

ファイトウーマンである。

病棟勤務をずっと続けてきた。ふり出しは整形外科、皮膚科病棟→消化器内科病棟→泌尿器科、神経科病棟→内分泌科病棟→循環器センターそして現在の神経内科、免疫血液内科の病棟という順序。

この間、看護した患者はいつたい何百何千人にのぼるのだろうか。ちよつと計算がつかない。登茂子さんはこんな表現をした。

「患者さんつてわずらわしいんですけどね、患者さんにわずらわされているつて、好きなんです。患者さんのこと考えてわずらわされている自分が好きなんです」

勤務時間が終わって自分の部屋に帰るその途中でも、ふつと気になることがあると、きびすをかえす。自分の部屋に帰っても、あの患者さんには明日はこういうアプローチをしよう、家族にはこういうことをたしかめておこう、また家族のホンネにも触れてみようと考え続ける、つまり病気の回復という頂点を目ざして患者を中心に登頂のためのプランを細密に練っては実行してゆくそのプロセスがたまたま面白く好きだという。

その過程のなかで、医師に対して意見をいわなければならないと思つたら、遠慮なしにズケズケいう。

医療、看護というのはチームワークだから、かわる医師、看護婦、家族、患者の気分の一致、感性の一致が重要になってくる。しかし、生命の危機を前にして患者はもちろんのこと家族も医師

も看護婦も、強いストレスの渦中に放りこまれた状態だ。ある意味では全員が気質をむき出しにしないではいられない局面に立たされる。

そういうギリギリの場で気質と気質が正面衝突してしまうことがある。

「どうしても その患者だけは好きになれない医師も出てくるわけです。同じ病室の同病の患者なのに、Aさんに投げる言葉はいつも冷たく、Aさん以外の患者にはやわらかい。そういうことが現実にあります。相性というものがある。相性のよくない医師と患者の間のいいようもないとげとげしい緊張をほぐすのは、看護婦の役割になるのです。

相性がよくないとその患者の苦痛に対しても冷たくなる。適切な処置にも欠けるところが出てくる。それでは患者も私たち看護婦も窮地に立つてしまいます。そういうとき私は率直にはつきりと、弱い患者の側に立つて、医師に苦言をいいます。

患者第一、患者大事という原点に立つて意見をいいます。そうやって、関係を少しでもいいほうへ持つて行こうとがんばります」

まるで、P K Oの役割である。

しかし、考えてみるに日本の医療界では、患者が弱者、医師はその患者の生殺与奪の権を独占的ににぎる強者という位置づけが習慣的に容認されているだけで、そこに平等な人間同士というもうひとつの関係が構築されていない。医師はエリート、という社会では往々にして患者は厄介者に過ぎず、とりわけ名もなく貧しく美しくもない男や女が患者になった場合は、診るものと診られるものとの間にやさしい人間的な絆が成り立ちにくい、冷たい断絶が走りやすいということになるのだと思う。

看護婦はこうした社会がつくり出す不備不足を、ベッドサイドでとつきにつくろわなければならない立場に立たされる。

医師と患者、その家族との間に生じる異様なストレス、摩擦は、病気よりも患者をいためつける結果となるのだから、立ち足はだかつてその関係をやわらげなければならないわけだ。

本来の意味でのPKOである。

「医師もまさにひとさままで、患者に親身になれる医師がいなければありません。

床ずれひとつでも、ああこれでは痛いですよねえ、こういう手当をしましょう」という言葉を自然に出せる医師、患者さんに、「辛いですよ」と言える医師もおられます。一方、「痛い苦しいって、オレはちゃんとやることやつてるゾ」っておこる医師もいますしね」

感情がもつれてくると、患者の臨終に立ちあうことまで避けてしまう、そんな医師もいないではない。そんなときは医師のほうにも複雑な敗北感がわだかまっているに違いない。こう見てくると医療こそ「生きもの」という感じがする。ちよつとした齟齬が次第に亀裂につながり、その患者が回復に至るにしても死に至るにしても無意味な摩擦、ギクシヤクを経してしまう。そういうこともある。後藤さんは、そういう危機回避、危機管理が看護婦の重要な仕事になっていると力説するのだった。

○

いい看護というのは……私は後藤さんと話をしながらようやくその輪郭がつかめてきたように思うのだった。

人生において「病む」ということは十中八九、で避けられない過程である。「病む」のは「生き

ている。証拠でもあるのだから。そして、その「病む」という局面で、患者はもちろん医師も看護婦も患者の家族や友人、つまり患者を中心にかわる複数の人々が、病むこと、看ること、診ることを通して何かこれまでには知り得なかった体験し得なかったあたらしい価値観を知り、かつてなかった美感、感動に至る、つまり「病」を契機にあたらしい「世界」に到達したという実感を持ち得たとき、「いい看護」ができたといえるのではないか。

大いなるドラマ体験。人生の凝縮としてのドラマを体験し、そのなかで自分が変革されること。つまりそのドラマを生きるなかで少しでも進歩をちとれたとき、「いい看護」が成立したといえるのではないだろうか。

また、後藤さんはこうもいったのだった。

「回復、つまり自立なんですね。私はそう考えてます。病気をなおすということは患者が自立して生きることを回復することだと……」

看護とは患者の自立を支援してゆくためのサポートでありリードなのだと、後藤さんはいい、また同時に看護婦自身もその行為を続けるなかで自立した人間に成熟を果たしてゆくことと、認識しているのだった。

しかしそれは、外側からはなかなか見えにくいプロセスだ。極めて内面にかかわる変化だ。たとえば、傷口がふさがったとか、臓器の機能が回復して検査データの数値がよくなったというような目に見えるかたちではあらわれない。何となく人柄が大きくなったとか、やさしくなった、思いやりが深くなった、といったような人間的な変化であって、数値ではあらわせないしテストでわかるものでもない。ましてやそのような自立性の増大ないし自己変革は、看護料や医療費の対象でもな



い。

しかし、後藤さんは、いい看護とはそこまで到達したときにそういえるのだと考えている。それが看護婦のよろこびの部分であり、看護労働が研ぎ出す「光」であるというべきなのだろう。

あたらしい患者に出あうたび、後藤さんはそのような「いい看護」への到達を夢み、いい看護を志し、燃える。

「患者はわずらわしい。でもそのわずらわしさに懸命になれる自分が好き」という言葉で、後藤さんは語ったのだが、私はその言葉に深く納得する。

そうして、看護という仕事が単なる医療技術の展開と遂行ではなく、もつと全人的な肉体の機能と精神の充実、自立を目ざす同行者の多い旅のようなものだ、と納得するのである。

○

しかし、とはいうものの、夢はそう簡単には実現しない。一人相撲に終わってしまったら、もう一と息というときに、患者を死に奪われることもある。

最近もこういうことがあった。

患者は女性。仮にSさんとしておく。年齢は二十代後半。会社員の夫との間に一児があるが、その子を産んだときからぐあいが悪くなった。

白血病という診断を受けた。ショック。治療に専念するために、Sさん夫妻は、赤ん坊を施設にあずける決心をした。Sさんには同居の母親がいたが、母子分離ができておらず、何につけてもSさんは母親の援助を求めた。入院も母親のつきそいなしには不可能だとSさんは懇願した。そんなわけで、赤ん坊は施設へ、Sさんと母親は病院へという非常事態になった。三年ほど前のことである。

後藤さんは入院当初からつきあつてきた。Sさんは骨髓移植を希望していたが、家族のなかにもまたバンクにも適合する骨髓はなかった。

このままでゆくと余命は二年、Sさんの母親は内々覚悟を決めていたという。

このSさんには後藤さんの他に受持ちの若い看護婦がついていた。後藤さんは主任として若い看護婦を指導しながら患者のSさんを中心に、母親、さらに医師と、かわりあう全員の呼吸を合わせてゆく役割を買つて出ていた。

困難はいくつもあつた。まず第一にSさんの病気は血液のガンでありかなりむづかしいものであること、母子分離が不十分で一刻たりとも母なしにはいられない心理状態であること、母とは向きあうが、訪れる夫にはよそよそしく夫のほうもよそよそしい素振りを見せる。その上、担当医師とは折りあいがついていなかった。

症状は日を追い悪化して行つた。私が後藤さんに従<sup>したが</sup>いて病棟に入つたころ（昨年二月）は呼吸困難で酸素吸入が必要であり、顔やからだはステロイドホルモンの副作用でパンパンに脹<sup>は</sup>れ、痔もひどく、毎回便をかき出さないといけない状態で、心理は不安定だつた。

ただ、そういうSさんの気分<sup>に</sup>灯をともしものがたつたひとつあつた。こどもの顔を見たい、こどもにあいたい、家に帰りたい、という強い願望である。

後藤さんは酸素ボンベを携帯すれば、帰宅も可能と判断し、その方向で帰宅作戦を練つた。

医師との折りあいが悪いワケは、Sさん母子が、処方されたクスリをめぐつてあれこれ医師に質問し、それを医師がうるさがつたことが原因で、またしばしばSさんが医師の指示通りにクスリをのまないということも理由だつた。

医師は後藤さんに向かって「あの患者は嫌いだ」とハッキリいったほどだ。医師のプライドを傷つける患者と受け取ったのだろう。しかしそれはSさんが治療に積極的に参加する姿でもあったのだ。インフォームドコンセントを求めているのだ。しかし、医師はそうとはとらず、「嫌い」と切つて捨てる態度に出してしまった。

受持ちの若い看護婦と後藤さんは医師とSさんとの関係修復をはかろうとしたが、これはあまり成功しなかった。その八方ふさがりのなかで後藤さんは帰宅作戦を成功させて状況の転換をはかった。

結局、Sさんは昨年三月下旬、突然の脳内出血で亡くなってしまうのだが、亡くなるまでの間に五回の外泊を実現した。脳内出血が最後の引き金だったが、その前に突如として視力を失うというショックも、Sさんを襲った。

これには全員があわてた。Sさんはパニック状態におちいった。酸素ボンベをたずさえクルマ椅子で帰宅、三歳になつたかわいいさかりのわが子を見たそのあとで、視界は突然暗黒にぬりつぶされたのだ。

母親の話によると、亡くなる一時間前のことだったという。Sさんが「お母さん、お母さん」と声をかけてきた。もう夜の十一時を過ぎ、病棟は闇に沈んでいた。「どうしたの」とささやくとSさんは「もう死んでもいい?」と聞いた。とつさに答えられず「え? 何?」と問い返した。発病以来「こどもはね、お母さんよりさきに死んではいけないのよ」といういい方で、娘をばげましエネルギーを与えてきたのだった。だからとつさに返答はし兼ねた。Sさんはもう一度いった。「お母さん、もう私、死んでもいい?」

母親はひと息ついてこう答えたという。「もういいよ」。こんなにがん張つて、医師の告知では去

年の夏までの命とされていたのにここまで生きのびたのだからもういいとシンから思った。するとSさんは「ああよかった」とほんとうに安心した声音でいって、沈黙した。それから一時間ほどあとの十二時過ぎ、Sさんに異変がきた。意識がなくなつたのだ。

終わりのときが訪れていた。

「でもね」と後藤さんがいった。「ひとついいことがあつたんです。よそよそしい感じだつた夫さんが、Sさんの視力がなくなつたときからまつたく変わったの。不安定の極になつて泣いてばかりいるSさんのかたわらですつと訴えをきいて、もういまはとにかくなまわすように包みこむより他はないって、からだ中をよしよしと触つて撫でてあげていた。若い看護婦はその姿を見て感きわまつて泣き出してしまつたのね。看護婦は嬉しかつたのね。ああよかった。そうなつてくれてよかった。一日中、さすり続けたそうです」

妻の死後、後藤さんのところへあいさつにきたSさんの夫は、見違えるように自信にあふれたキラツとした表情をしていた。最後に力もつくしてありつたけの思いをこめて、介抱看病したことで安定した心境にはじめてなれたのだろう。

やつと心をつくせたという満足が夫の顔を明るくしたのだろう。

後藤さんと若い看護婦はしみじみ語りあつたという。Sさんの死は悲しいけれど、夫さんがそれで成長したみたい、こどもさんとのあたらしい生活をスタートさせるエネルギーにきつとなつてゆくわよ。そして後藤さんは当の若い看護婦にとつてこのSさんとの経験は看護の困難と救いの両面を知るいいチャンスだつたと思うし、この若い看護婦の流した涙を尊敬すると、自分も涙ぐんだのだつた。

(この項つづく)

北京会議と世界の女性の流れを考えるシリーズ

記録 ● メキシコ会議

あこら編集部編

記録 ● コペンハーゲン会議

あこら編集部編

記録 ● ナイロビ会議

あこら編集部編

普通の女が参加するということ

斎藤千代

変わる流れ、変わるキーワード

深尾凱子

激動するアジアと女性たち——日本を見る目

松井やより

北京会議の特性と準備状況

張静・盧亜民

世界の女・日本の女——女性の地位・国際比較

坂東真理子

国連準備会議とNGOフォーラム

有馬真喜子

## 大震災で緊急対応 神戸YWCA

神戸YWCAは、海岸側の塀が崩壊、建物にも一部亀裂が入り、事務所内は机や本箱が倒れ、書類が散乱、三階の飾り棚のガラスは全壊しましたが、一応建物は無事。チャペルには一応四〇名の避難者を収容、「災害救援センター」の貼り紙を出し、大阪YWCA経由で届く物資や行政からの食料を配布するなど、大わらわの活動を続けています。

### 大奮闘石井ふき子さんと「スクールすばる」

西宮市北口の石井さん宅は、中の書類等は散乱しましたが、建物は無事。山幹（やまかん＝山手幹線道路）に面した地の利を利用して、あらゆる物資の配給センターとして、不眠不休の活動を続けています。フリースクール（へらくだ）や（へあこら）関係者はじめ全国の市民ネットワークからボ

ランティアも続々つめかけ、各収容センターと、被災者の詳細な調査をまず行ないました。その情報を基に必要な所に必要な物資を運ぶなど、実にきめ細かな活動を続けています。詳しくは次号でお知らせしますが、被災されてお困りの方は、ぜひ一報ください。細かい物でも対応できるかがり揃えてもらえます。知人の消息等も調べてもらえますが、言語に絶する多忙ですので、ボランティアに参加できる方は、できるかがり参加して手伝ってください。市民運動の典型のようなすばらしい対応です。若い方々の貴重な体験学習の場にもなることと信じます。

〒663 兵庫県西宮市深津町3-37 石井ふき子  
TEL 0798-64-5829

### 日本女性放送者懇談会が創立二五年に

NHK・民放・制作プロダクション・フリーアナウンサーなど、放送界で働く女性たちが、年齢・職種の垣根を越

えて情報交換しながら親睦を深めているこの会は、創立当時の一〇名の会員が一二〇名を越える会になりました。

毎年、放送界で活躍した女性にS J賞を贈るなどの活動が続けてきましたが、今年は二五周年記念の多彩な行事をします。

◇2月25日(土)、26日(日)「放送ウーマンの半世紀——番組を見て、聞いて、語ろう」於NHK放送博物館ホール(定員二〇〇名、女性がつくった貴重な一〇作品を二日間になたつて公開します。

25日 12時30分 斎明寺以玖子「みずほのくにの はじめのたかくら、女王卑弥呼」 13時45分 常田久仁子「欽ちゃんのドンとやってみよう」 15時10分 せんぼんよしこ「ああ、この愛なくば」 16時30分 石井ふく子「女と味噌汁」  
26日 11時30分 吉永春子「魔の731部隊」 12時 林小枝子「女子教育史その1-4」 13時30分 新井和子「現代の表情 もう黙ってはいられない」 14時35分 辻和子「苦海浄土」 15時35分 市岡康子「すばらしい世界旅行」  
16時45分 福田雅子「風よ陽よ墓標に 人間解放と宗教の課題」

◇3月3日(金)「S J賞受賞パーティー 特別賞秋山ちえ

子、S J賞 東海林のり子(リポーター) 橋本佳子(ドキエメンタリージャパン代表取締役) 於プレスセンター

◇3月11日(土)「女性キヤスターとニュース——私たちはどう伝えようとしているか」 小宮山洋子・桜井よし子・田丸美寿々・安藤優子・小宮悦子・野中ともよ・小玉美恵子・平野次郎(先着三五〇名) 於青山スパイラルホール  
以上、お問い合わせと申し込みは日本女性放送者懇談会事務局(TEL 03-33352-9275)へ。

## 白頭山写真展

ユーラシア大陸最後の秘境といわれる白頭山は、北朝鮮にあるため、その姿をなかなか目にする機会がありませんが、写真家岩橋崇至氏が、七回、二七〇日間入山して撮影した貴重な写真展が、二月一七日・二二日、有楽町マリオン一階で開かれます。「日朝関係の進展と理解の良き機会になると思います」と、在日本朝鮮民主女性同盟からご案内が来しました。入場料は六百円です。

なお今まで観光客に門戸をとぎしていた北朝鮮は、今後、積極的に「観光立国」に方針を変えとのこと。





止、反女男差別、反部落差別、反

「障害者」差別

## 2 搾取がない社会である事

・ ひとに汗して働く者が主人公である社会を！

・ ゴミ・エネルギー・資源を考えた  
ら、計画経済を！

等が、とりあえずの最低条件です。

そんな社会を目指して着実に学び、そして今の社会・生活のあり方を見直し、実践行動する一年にします。

スィンク グローバル（地球規模で  
考え）

アクト ローカル（足元で実践）に  
挑戦！ （尾花沢市 菅野真治）

◆約七五〇年前、道元禅師は、言われました。「ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいえになげいれて、仏のかたよりおこなわれて、これにしたがいもつてゆくとき、ちからをもい

れず、こころをもついやさずして、生死をはなれ仏となる」と。

つまり、「自分の身体も心も、放ち

忘れ、仏、すなわち、無始の過去から無終の未来へとこの天地大宇宙を生きつづけに生きている大いなるもの、大いなるいのち、宇宙の大生命に、せーんぶ投げ入れてしまふ。そうすると、仏のほうから自分に働きかけがなされる。その働きかけのまにまに生きて行くと、別に力まなくとも、あるいはあれこれと思わずらうこともなしに、自然と、外界の変化にとらわれることのない絶対自由の境地、すなわち仏の世界を、生きて行くことができるのである」という意味であります。

そして、仏の本領とは、絶対平等と不殺生戒であります。かくして私は、今年も、同じ人間を差別の眼で見る権力と社会の偏見と、自衛隊の海外派兵

という名の人殺しを阻止するべく、生きて行くつもりです。

（東京 遠藤 誠）

◆戦後の五十年をよくぞ生き抜いてきたものです。同じ世代の元従軍慰安婦の五十年——日本政府に対し、ともに国家保障を要求し続けます。

座り込む「慰安婦」の手の深きひび  
膝まついて凍足を抱け首相らは

——暮れの座り込みに加わつて。

カンパをよろしく。

（東京都 近藤悠子）

◆何だか息苦しいと目を凝らせば、冷静な目と熱い心を持つて行動する人々を奇人・変人扱いして切り捨ててしまふ「常識人」の何と多いことでしょう。さて今年、奇人・変人と言われる人との出会いを大切にしたいと希つています。そして今年、ヘンジンにヘンジンして、いじわる婆役に徹したいナと。

(これは願望。なかなかむづかしい……)

(広島市 畠山裕子)

◆いよいよ励む年です。私は国会をいきいきと開かれた場にするために励みます。

(西宮市 土井たか子)

◆今年は大変な年だと思います。小さな力でも出してゆきたいと思つています。

(東京都 斎藤鶴子)

◆世紀末まであと五年。世界は大きく変わろうとしています。今年は大きな精算の年です。

今までよい種蒔きをした人は実り大きな収穫の年となるでしょう。サンマーク出版刊「愛の四柱推命」の中国語版が香港で翻訳され、出版されました。世界へ向かつて読書の輪が広がっています。世界は一つ。平和を目指して頑張ります。

(三鷹市 楨 玉淑)

◆提訴から一年三か月。昨年中は、傍

聴やカンパなど、いろいろなご支援をいただき、本当にありがとうございます。

「みるくうゆプライバイシー裁判」も次回からいよいよ証人尋問に入ります。国家や行政が考える「人権やプライバシー・思想信条の自由」の本音をあらわにするような質問、また、当たり前の感覚からの警察への素朴な疑問など、一緒に考えて下さいませんか。この裁判への感想や、疑問でも結構です。こんなこと、警察官に言いたい、聞いてみたいと思うこと。裁判長への言葉。etc...何でもお聞かせ下さい。

中盤に差しかかった裁判、ここら辺でもう一度じっくり考えてみたいと考えています。そこで、貴方のお知恵拝借。どうかご協力ください。

(徳島市 河野和代)

◆ペルー人労働者への生活支援が入管法の「不法就労助長罪」に問われている青柳行信さんの公判もすでに十五回を迎えました。今までの公判でペルー人労働者と、彼女らを雇用していた企業の橋渡し、そしてさらには入管行政の後始末的なことまで青柳さんがしていたことなど、青柳さんの活動の正当性は十分すぎるくらい立証してきただけだと、支援者の立場から私は考えています。

しかし、現在の日本の裁判の現状を考えると油断はできません。これから皆様のご支援を宜しくお願い致します。

(福岡市 谷 和美)

詳細につきましては、左記の連絡先までお問い合わせ下さい。

青柳さんへの不当弾圧を許さない会

福岡市博多区美野島2・5・31

TEL & FAX 092・431・5709

◆かしいサルたちがいなくなつた時、地球はすいぶん汚れていましたが、その後少しづつキレイになつてきました。空気も澄んできました。小川にはめだかも泳いでいます。……でもあたりを見渡すとゴミだらけです。そしてはるかかなたに原子力発電所が……。

(甲府市 小木曾 泉)

◆〈あこら〉会員が政界で活躍して頼もしい限りですが、しいたげられている世界中の弱者のために目立たない援助をしておられる事務局の皆様のお仕事を、より一層尊敬しています。

(広島県 中谷明子)

◆焦点がしほれないような時代「あこら」は指標です。どうぞご自愛の上、佳き年をと念じます。

(横浜市 山口美代子)

◆戦後五十年の年ですね。いろいろ考えさせられます。(西宮市 川名紀美)

◆今年もお元気で愉快におすごしください。(あこら)にもますますすばらしい年でありますように。

(東京 田嶋陽子)

◆予想だにしなかったことの連続でとまどうばかりの一年でした。それでも私は、おかげさまで毎日を無事にかさね自らの生きる方向をみつめて元気にすごしています。

ますます羽をのばして二一世紀を迎えたいと思っています。

(東京 山下正子)

◆いつも新しい問題に切り込んでゆく〈あこら〉の姿勢を高く評価しています。今年もめげずに頑張りますよ。

(所沢市 斎藤耶寿古)

◆正月休みに積んでおいた「あこら」を一気に読み、感動しました。

今年もよい情報を送ってください。

(東京 芦谷 薫)

◆「あこら」の情報、北京会議など、たいへん役に立っています。ありがとうございます。(川崎市 井上輝子)

◆昨年は政治経済ともに激動の一年でした。

◆今年も何がおきることか不透明な一年になると予想されますので 変わらぬお力ぞえをお願い申し上げます。

(広島県 栗原君子)

◆まっすぐに

そんなに まっすぐに

走らなくても いいのに

たちどまつて 道草すればいいのに

(よいことがたくさんありますように)

(名古屋 山下智恵子)

◆今年も一緒にできる機会があるうかと思ひます。ご健闘を！

(東京 井上礼子)

◆戦後五十年——ながかつたようなアツという間だったような複雑な気持ち

です。今年は北京ですね。

(東京 林 慶子)

◆坊やお守に つれられて

どこに遊ぶが お好きだろ

春は羽根つき 風あそび

梅や桜の 花のもと

桃の節供に なったならば

白酒あげよか 雛の前

夏は甘茶を 釈迦の前

菖蒲 たなばた 柏餅

天王さまの お神輿に

わいわい騒ぐも うれしかろ

(子守唄・関東地方)

憲法集会はスシツメ満員。この力を

束ねましょう。(東京 山崎朋子)

◆東アジア女性フォーラムでは本当に

ご苦労さまでした。私の方は戦後補償

実現国際キャンペーンの意見広告の活

動に忙殺された年末でした。

いよいよ「戦後五十年」の年ですが、

終わりの年ではなく始まりの年にしなければと気合いを入れ直しています。

(東京 金英姫)

◆猪突猛進はやめて

ゆつくり歩かなきゃ

見えないものがある

ちよつと立ち止まらなければ

見失うものがある

混迷する世の中で

大きな流れを見極めて

一つ深呼吸してみたいと思う

——無事のありがたさをかみしめる

この頃です

(ナイロビから十年 早いですね)

(福岡市 石原豊子)

◆一〇〇〇年に一度の節目、二〇〇一

年まであと五年。この一年一年をどう

見据え、迎え、重ねて行くか、四谷事

務所もしっかりと歩んで行かなければ、

と気を引きしめております。

今春にはフレッシュヤーズ二名も加え、スタッフ一同、元気いっぱい、前向きに進みます。

(企画制作四谷事務所 伊藤祐子)

◆スウェーデンの国会議員選挙で四割

が女性になりました。それを支えたの

がユニークな草の根運動でした。

〈あごろ〉でこれを参考にして女性議

員をふやすことはできないでしょう

か。

なんとか行動をおこしたいものです

ね。

(松戸市 野村三枝子)

◆次から次へと問題が出てまいります

が、選択をややまらないように、しつ

かり進みたいと存じます。

(東京 江尻美穂子)

◆女たちが自分の姿に気づき、変化す

ることに力をそぐことが自立の一步

であり、他の女たちへの目覚めになる

と思っています。お会いできます時ま

でござけんよう。

(名古屋市長 森美恵子)

◆新年おめでとうございます。とは言っても、一月十七日に起こった阪神大震災は、年明け早々、私たちをうちのめした。また、各地から送られてくる市民運動のニュースは、どれもこれも暗いものばかり。

選挙にしても、北海道知事候補に女性が登場し、いよいよ日本初の女性知事誕生かと思つたら、ナント北海道電力の戸田会長のキモ入りだという！

アーア！

〈あこら札幌〉の通信も、決してふまじめに書いているつもりはないけれども、さりとて、迫つた緊急事態が起こつて、「うるさい！ 女なんかひっこんでいろ！」といわれないために、日頃から、はつきりと「女の本音」を言う練習をしておかなくては、と思ひ

直して、今年もあせらずに等身大で、スタートします。嬉しいことに、読者もふえて、いろいろな方の声をどんどん掲載していきたいと思ひます。今年もどうぞよろしく。よい年にしていきましょうね。

(あこらさつぼろ)

◆今世紀もほんとうにあと数年、気分がいつこうに高揚しないのが残念ですが……。

どうぞ今年もご活躍下さい。かげながらエール送らせて頂いております。

(東京 緑川仁子)

◆あつてはいけないこと、あるはずがないと信じていたことが次々と起きた九四年でした。微力ながら、発信する仕事を続けてゆこうと思ひます。

(川崎市 柴田頼子)

◆七十歳をこすとやはり一年の重みを感じさせられます。心底に横たわる透明な寂寥感が少しずつ厚みを

増すように思ひながらも、元気がつ多忙に暮らしております。講演はほとんど止めて書く方に力を入れていきますが、出歩きはとまらず、おもしろい旅もたくさんいたしました。

今年も何とか健康に仕事が出来ますようにと思ひつつみなさまのご健康を心から念じます。

(向日市 壽岳章子)

◆「アジアの世紀」といわれる二一世紀まであと五年、そして戦後五〇年。時代や世界をどのようにとらえつつ新しい年をむかえられたのでしょうか。

私は昨年四月、三三年間働いた朝日新聞を定年退職してフリーになりました。それ以来、ジャーナリストとしての活動も続けながら、女性運動に全力をあげてきました。春には「女性の人權アジア法廷」、秋には「東アジア女性フォーラム」開催に力を注ぎ、今年

三月には「日本のODAとアジア女性」国際会議を開き、アジア一〇か国から一〇人の女性を招く準備をしております。このほか、「日比混血児を支える市民ネットワーク」作りにも協力してまいりました。それぞれの活動にお力添え下さったことに心から感謝しております。

二〇年間関わってきたアジアの女性との連帯をさらに強めるため、アジアの女たちの会の発展として「アジア女性資料センター」を今春設立することに致しました。国際的視野そして草根の視点から、女性に関する情報発信や女性の人材養成などを計画しております。まず手始めに、今年の女性にとつての最大のイベントである秋の北京世界女性会議に日本女性が責任ある参加ができるよう「NGOニュース」を一月から発刊致します。

定年になったのに、ゆつくりお話もできずに心苦しく思っておりますが、どうか今後ともさまざまな形でお支え下さいますようお願い致します。

(東京 松井やより)

◆北京会議、がんばって参加してみようかなと思っております。

(岡山市 市場恵子)

◆祈・心身快適！

へあこらの健全なご発展をお祈りいたします。フレ、フレ！

女解放を願う同士の激しい闘争の時ではないと私は思います。対等な関係づくりのために新たに「平場」をと言ってもよいと考えます。

(東京 林 郁)

◆私は勉強不足のためか、時代の移り変わりに少々とまどつています。

(和歌山市 山本まき子)

◆人生何がおこるかかわらないという

ことを今度ほど実感したことはありません。

昨秋旧姓にもどり、新年は子ども二人と新居でまた一からやり直します。

(広島市 嶋末和子)

◆昨年は、私にとって大変売りの多い年でした。

一 神奈川の仲間と一緒に活動しております開発協力のNGO「草の根援助運動」は今年で五年目に入りますが、これまでの少額のプロジェクト支援から、いよいよ向こう三年間フィリピンNGOの環境・保健衛生プログラム援助へと飛躍をとげます。

二 昨年、ブレトンウッズ体制のためたかない五〇周年にあたり「IMF・世銀を問う連絡会」を発足させました。九月のマドリッドの年次総会をはじめ、ジュネーブでの「債務協定運動」の国際協議、フィリピンの債務削減調

査団など東奔西走、円高でアジアの国の債務が急増している事実に驚いています。

三 今年三月のコペンハーゲンでの国連社会発展サミットの準備会議に出席するため、昨年は二月、八月とニューヨークへ飛びました。国内でも NGO 準備会が結成され、とり組みについて政府との折衝を続けてきました。

四 NGO の国際組織 E L T A L L E R の副会長を努め、本部のあるチュニスとシャトルしております。

今年もがんばりますのでよろしくお願ひします。(横浜市 北沢洋子)

◆新春のご挨拶を申し上げべきところ、公職選挙法の議員の賀状禁止の規定を守り、「頂いた賀状に、手書きは可」の通り、手書きにて少しずつ賀正のはがきをお出ししています。降雪の前のおうす墨いろの空のような政局です

が、私は国民、県民はみずからの任務や仕事に、我が力でがんばっている現状にこそ未来を見出しています。しかし、政治の役割は重く、いかに政治改革を法制化しても、金権による政・

財・官の悪因縁は断たれず、小選挙区は、一歩あやまれば、一党独裁又は野党のない政治が生まれるでしょう。こんな時だからこそ、理想選挙で七月参院選を闘い、勝利して、福祉、人権、平和の熊本から、世界に貢献したいと決意しています。お力をおかし下さい。

(東京 紀平悌子)

◆敗戦後五〇年、一八年前にお会ひした「朝鮮人強制連行」の著者、朴さんの「先ず自国の政府の民主化をして欲しい」という言葉の意味を、重く苦くかみしめています。

今年は大変な年だと思っていました。が、新年早々の大地震。

「土建屋政治」が多くの人命を奪い果たした。自衛隊の初動の遅れを理由に自衛隊法の改正が浮上。関東大震災後のことをかんがえるとぞつとする思いです。

(東京 宇田川順子)

◆一九九四年は私にとりまして、本当にめまぐるしい年でした。二月に、アメリカ国会で開かれた地球環境国会議員会議出席のためワシントンへ飛び、ゴールデンウィークには、国連本部での情報集めと、ニューヨーク市立大学「女性と社会センター」との協議のため、ニューヨークへ行き、六月はマニラで開催されたアジア太平洋女性と政治会議の議長役。八月と九月は久しぶりに長く国会が閉会だったので、欲張って五つの国際会議に出席するため、ニューヨーク、モスクワ、カイロ、パリ、ジュネーブと飛び廻り、九月下旬に帰国致しました。九月三十日、臨時

国会開会と同時に、法務委員長に就任し、馴れない仕事をこなすのに汗をかく日々でした。

永田町では依然として国民不在の感を与える権力闘争と政治家の離合集散がくり返されていますが、去る十二月に発足した新進党への参加を国民会議のお仲間が全員決定した中で、私唯一人不参加を主張するのは、苦しい事でした。私のような者を比例区に推薦し、党議拘束なしに、参議院で十一年半も活動させて下さり、又、数々の議員立法も出させて下さった公明党に感謝の意を表しつつ、自分の信念と立場を貫くためにはどうすればよいかと日夜悩み続けました。結論として、新進党への参加は断り、他の党からのお誘いも二、三ありましたが、次の選挙には出ないことにして、六月末の任期満了時点で政界から引退する事に決めまし

た。まだ、やるべき事や頼まれている事も沢山残っているんで、任期一杯、国会で全力投球する所存でございますが、引退後は、国内的にも、国際的にもNGO活動を行い、命ある限り、基本的人權の擁護、女性の地位の向上、環境の保全、グローバルな民主化と福祉社会の実現、社会主義に基づいた恒久平和の樹立等をめざして、微力ながら、たゆまぬ努力を続けて行きたいと思っております。（東京 中西珠子）

◆激動する永田町。そのなかを、方向を間違えないように、見定めつつ走っているつもりです。

新年早々に、私が「新党さきがけ」に移ったので、さぞ驚かれたこととぞんじます。

考え抜いての決断でございました。七月には選挙です。今後とも、ご支援下さいますよう、また、支持者の輪を

広げることに協力下さいますよう、おねがい申し上げます。

（東京 堂本暁子）

◆日本の敗戦から五〇周年を迎える節目の年ですが、政治や経済の混迷はいよいよ深まり、「戦後」というより、「新たな戦前」とも言うべき状況を呈しています。

環境問題においても、地球規模の環境危機の中で、これまでのような開発や生活のあり方に対する反省の意識が生まれてはきているものの、それが具体的な政治や経済の中に生かされているとは言い難く、あいかわらず破壊へ向けて走り続けているのが現状です。

沖縄県でも、四年前、保守県政から革新県政に変わりましたが、行政の内実はほとんど変わらず、公共工事を中心とする開発優先の構造はいつこうに改められません。昨年十一月に行われ



た知事選の投票率が史上最低を記録したのは、県民の県政への失望、批判を表していると言えるでしょう。

行政に期待することが難しい中で、県民一人ひとりの立ち上がりと市民団体の働きがますます重要になってきています。やんばるの自然をめぐる状況も今年は正念場。二月に日本弁護士連合会自然保護委員会のやんばる視察、沖縄県が四月に予定している大國林道の開通式、急ピッチで工事が進んでいる北進進路、十月末には鳥獣保護区の更新時期をむかえるなど、次々に課題が待っています。

百万年の昔から、多種多様の固有の生きものたちと私たち人間の暮らしを育んできたかけがえのないやんばるの自然を、次の世代に引き継いでいくために、今年も会員一同、力を合わせてがんばります。

大國林道では現在、年度末を控え、いたるところで舗装工事や、のり面崩壊の修復工事が行われています。昨年五月の開通式延期の直接の理由とされた大崩壊の現場は、半年かかって修復工事が終わりましたが、それに要した費用は、こだけでなんと五、八二五万円！ 自然災害復旧という名目（無理な工事を強行した人災ではないのでしょうか？）およそ九〇％が国庫から支出されます（残りは県費）。

大國林道の建設費は四五億九〇〇万円と発表されていますが、それはあくまでも建設だけにかかった額です。十七年間の工期の間には無数の崩壊が起こっており、それを修復するための費用は膨大な額にのぼっているものと思われ（その資料の提出を私たちは現在、県に求めているところです）。大崩壊箇所のすぐ隣でも、崩れかけた

のり面の補強工事が進行中であり、今後、崩壊→修復のいたちこつこがえんえんと繰り返されることでしょう。大國林道はまさに、国民・県民の血税を食いつぶす「金食い虫」です。

大國林道はまた、多目的林道とされています。林道は本来、字のごとく林業振興のためにつくられるものですが、多目的林道となると本来の目的を離れ、何に使っても許されることになります。大國林道はすでに、週末ともなるとサーキット場と化しています。県が大々的に開通式を行えば、車や人の入り込みが急激に増え、すでに破壊が進んでいる森林生態系に、さらに大きなダメージを与えることが予想されます。県は、開通式に県費を無駄づかいするのではなく、森林生態系の保存のために使うべきです。

（那覇市 やんばるの山を守る連絡会）

◆戦後五十年をむかえ、平和、性・人

権、酒・たばこの害防止、女性の家H  
ELPなどのとりくみをさらに進めて  
まいりたいと存じます。

(東京 日本キリスト教婦人矯風会)

◆四月、相模原市議選に、西村あやこ  
必勝をかけパワー全開で進みます。熱  
いご支援をよろしく願います。

(相模原市 婦人民主クラブ全国協議会)

◆戦後五十年の歴史を深く心にとめ、  
過去の罪責を国家が償い、アジア・世  
界の友人と真に手をつなぐことのでき  
る年となりますように努力をつづけた  
いと存じます。

(東京 日本キリスト教女子青年会)

◆世界の女性の連帯を！

(東京 婦人民主クラブ)

◆戦後五十年、二十世紀も終わりに近  
づいています。未来を民衆の時代とし  
てきり拓くため、今後とも力を尽くして

いきたいと思っています。

(東京 アジア太平洋資料センター)

〔政局に思う〕

今年には女性参政権獲得五十年の年で  
す。残念ですが、小選挙区並立制にな  
って、ますます女性が進出しにくい状  
況になります。

・きれいな政治をするために企業献金  
の廃止。

・金のかからない選挙の実現（へあご  
ら）で推薦して立候補する人ために、  
供託金の募金をしてはどうですか）。

・政党助成金の実施は企業献金を廃止  
後に。

・国民投票は憲法改正の時だけでな  
く、選挙時の公約違反など、公聴会で  
なく、民意を聞くべき政策の転換を、  
国民投票ができるようにしてほしい。  
解散・総選挙よりもお金がかからず、

総辞職・内閣改造で誤魔化すのでな  
く、政権交代し公正な民意が反映する  
政府にしてほしい。（したがって政党  
又は立候補者は政策を明確にし、有権  
者は政策を認識して投票する。）

・消費税について、欧米で大型間接税  
は日本より税率は高いが、食料品はじ  
め生活必需品は非課税にしています。

（カリフォルニア州に住む友人は、ア  
メリカ生活は快適、安くて豊かに暮ら  
せると、米国永住権をとったと言つて

きました。）直間比率の是正をするに  
しても、消費税だけを三％から五％に  
するのでなく、世界の他国でもやつて

いるように、食料品や生活必需品を非  
課税にした場合、どのくらい減収にな

り、他の消費税を何％にしなければな  
らないのか、納得のいく数字を示して  
ほしい。

・税制に関係する天下りや特殊法人へ

の横すべり禁止も徹底すること。

(東京 牧野靖子)

◆小選挙区制の成立で、政治がおもしろくなくなったような感じがします。そしてエキサイティングでもなくなつたような。

制度面で言えば、今回の新制度で導入された「惜敗率」とは一体何なのでしょう。新聞の解説記事を読んでも今一つよくわかりません。

話は変わりますが、今年四月の知事選では共産党以外の全会派が「県民統一候補」とやらを擁立して、オール与党化を狙っているみたいです。

あまりにもしやくにさわりますので、私は知事選を棄権しようか、それとも「私の意向を無視したオール与党化は御免だ」とでも書いて、無効票を投じようかとも、今、現時点で考えています。

(福岡 谷 和美)

◆金権汚職、国民不在の政治・政党の

排除

- ・ 銃犯罪の暴力絶対否定
- ・ 血税の有効な行使ができる政党
- ・ 九条の尊重、国連中心も止むなし
- ・ スローガンのみでは承服しない、政党資金交付に価しする政党人たれ、投票の中味の認識
- ・ 環境汚染は人間愛への侵害者、取り締める政策の実現

・ 貧富差は個人努力の成績表ではない、弱者も救える平等政治の実施を  
・ 国家予算の公平割当実施を監視し、声なき声も汲み上げる。

・ 役人を真にリードできる実力と清潔さの多い政党たれ

・ 女性の権利を尊重する政治への要求に誠実な対応を望みたい。

(東京 丸山英子)

◆被疑者・被告人のための当番弁護士

だけではなくして、被害者のための当番弁護士設置も必要と思つてます。

・ 銃取り締まりにも加わつて犯罪をなくす努力をすすべきです。

・ 「あごら」は子どもへの性的虐待も特集してください。(福岡 諸藤和司)

〔近況など〕

◆たおやかに雲の海ゆく月の船

生まれ清まる年の夜空の

昨年は節目だったらしく、暑中みまいを作るヒマもなく、年末は賀状が作れず……やれやれ。でも年頭からシゴトをしている。元氣な一年になるとよいですね。本年もよろしく。

(東京 田井亮子)

◆憲法九条を守るヒロシマ訴訟団の原告の一員として闘っております。新しい戦前の兆し、不安でございます。

(広島県三原市 岡田黎子)

◆昨年の暮れ、ミンスクとキエフの遺伝学研究所の招きで、大阪大学医学部、放基研の野村大成先生とともに両都市を訪れました。「零下20度ですよ」とモスクワの友人たちからおどかされながら。

今回、パリのユネスコからの協力依頼を受け入れる形で、チエルノブイリ・エコロジカル・サイエンス・ネットワーク (UNESCO・CESN) の遺伝学共同研究の第一歩を進めることができ、私たちは心をひきしめながら新しい年を迎えました。

私たち〈女性ネットワーク〉のさきやかな草の根活動も、六年目に入り、新しい発想でリプロダクティブ・ヘルス研究へ重心を移してゆこうと思っております。(武蔵野市 綿貫礼子)

◆お陰様で、多事多難ながら充実した一年となりました。今年も実り多い年

となるよう努力するつもりです。皆様にも、豊かな年となりますようお祈りいたします。今年もいろいろ助け、助言して下さい。(東京 酒井興子)

◆老夫婦と犬一匹の年金生活ですが、どうにか大病にも罹らず、互いにしたいことをして、退屈知らずで暮らしていますので御放念ください。

今年は、家庭科男女共修の仕上げと、第四回世界女性会議への参加に向けての準備に手を取られそうですが、期待に胸をふくらませていきます。

(東京 和田典子)

◆七二年と三か月を迎えました。ルワンダをはじめとして悲しい事の多い四年でした。私自身は沢山の方々と出会ひ、感謝の日々でしたが「被告席に坐るべき人間が、こんなに幸せでいいのだろうか？」と考えこんでおります。チマ・チヨゴリ事件には、大きな衝撃

をうけました。今年は敗戦から五十年、その五十年の答えがこれでは、あまりに悲しいことです。二十一世紀、それは国や国境を越えた共生がはじまる時だといわれてます。幼い時、ソウルの電車に乗ると、日本語ハングル中国語英語その他の国々の言葉が賑やかに聞こえてきました。早く、美しいハーモニーとして聞くことのできる地球に、互いに努力したいことです。

私個人としては、五十年前の教育が、何一つ反省することなく今日迄続いていることに「もう黙つとられへん」と、声を大きくしていこうと思っております。敗戦五十年、やつと真実を語ることの出来る日々がはじまります今年はその出発、第一年目です。

(生駒市 池田正枝)

◆北京会議での学びを期待して参加を予定しております。(東京 上原淳子)

◆二年前、小さな自費出版社をつくりキリスト教の伝道を願ってささやかながら働かせていただいております。出版点数は七冊となりました。そのうち一冊「心つないで」はキリスト教には触れていませんが、全盲女性の心の起伏、感謝と愛をつづったものです。健康者にも読んでもらいたいと思い、皆様に大変ご面倒を煩わせ図書館に申込みをお願いしたり、購入していただき、厚くお礼申しあげます。愛の輪が広げられ感謝しております。

(武蔵野市ロゴス社 富岡正敏)

◆自分の足で山を登り、大自然の中で描く楽しさを知った年、配偶者を喪った人たちと「響き」合う会を創った年、柳田邦男氏が「死の医学への日記」(毎日新聞)に、夫の闘病と私の対応を書いて下さった年——一九九四年を見送り一九九五年を「いでたちの年」

として迎えました。

あなたとの美しい出会いに感謝し、あなたのご多幸をお祈りいたします。

(東京 半田たつ子)

◆昨年十月一日オープンした「夢燈館」で働いています。障害者の社会参加を目的に開店したりサイクルショップで、障害者への理解を深めることと、地域の高齢者のたまり場になるよう、街の人達との交流をはかっています。

(浦和市 深田範子)

◆「あこら」に励まされながらの一年でした。北京の年、引きつづき、活躍に期待しております。

(京都市 服部 素)

◆「花の乱だより」は近々出すつもりですが、あまり中身はなく、フェミニズム・大正デモクラシーと相変わらず思っています。

(東京 片岡陽子)

◆人生も折り返しを過ぎたかなという

年齢になりました。だからこそ、今年は、たくさん遊ぼうと思っております。

(東京 榎原富士子)

◆昨年三月末、二十年余在職した東京家庭裁判所調停委員を停年退職いたしました。その間、多様な家事事件と係り、多くの出会いと学びに恵まれたことを感謝し、御礼申しあげます。

今後、世田谷ボランティア協会、社会福祉法人泉会、泉の会世田谷支部などを通して、引き続き励んでまいりたいと願っております。

(東京 近藤悦子)

◆十二月末、市谷加賀町に転居いたしました。新居は三階に一〇〇人ほど入れる小さな音楽ホールがついている奇妙な住いです。ピアノリストである姉の夢につき合わされたかたちですが、自分のやりたい集会も気楽に催すことができますだろう、と楽しみにしています。

地下鉄東西線神楽坂駅から徒歩十二

分、ミニコンサートや集会に、皆様にもご利用いただければうれしいです。

「わいふ」の分室も一隅にしつらえました。昨年は三月に東京女性財団の補助金による「母親の就労と母子関係」の研究をまとめ、五月には「老人ホーム情報センター」を発足させてフワフワでした。今年は「わいふ」はスタッフに任せ、政治の流動化のなかで「フアム・ポリテイク」をいつそう充実させていきたいと思っています。

政治、こいつしよに頑張りますよー！  
(東京 田中喜美子)

◆この「あいまいな日本」にあいそをつかしつつもふんばって生きていかなきゃと九五年をスタートしました。

(八王子市 中島光子)

◆初春や するすると後編の幕開く  
数え年五〇歳になりました。力まず、

ゆるゆると歩いていきます。

「女が動くとき日本が動く」のポスター、ずつと貼ってます。

(西尾市 羽向貴久子)

◆昨年は四月に元氣印の女性グループを三三〇以上紹介する「はじめて拡がるグループネット・東海・北陸女性発信編」(1200円)出版、十一月にはドイツへ日本女性の手芸品展示即売会に参加しました。私は自分で撮った写真を展示し、絵はがきを販売してきました。

今年は、一月二四日(火)のウイン女性企画の新春パーティー「おもいつきりおしゃれパーティー」(ルプラ天山にて)の企画をはじめとして、夏には北京会議に参加したいと思っています。  
(名古屋市 吉川富士子)

◆乙女的心変わらねど

亥かんせん暦一巡り

あとはどうなるこうなると

好きなこととして生きるだけ

(尾西市 浅野美和子)

◆はやいもので、私たちが医者となり夫婦となつて今年で十二年目を迎えます。以下、簡単な近況報告を

◇生活が夫婦とも朝型になつたこと。

◇生き物(セキセイインコ)：かかりつけの獣医さんも性別分からず・たぶん♀だろうと夫婦で推測)と暮らすようになったこと。

◇不動産屋さんに「……ちよつと自己資金が少ないですわね」と言われて、遅蒔きながら放漫経済を改めたこと  
(二世代三家族同居・身障者老人仕様住宅を計画中)(札幌市 小松ともみ)

◆戦後五十年。改めて不戦を誓い、憲法九条の理想を高く掲げます。

それにしても昨年は何という年だったのでしょうか。激動と改悪。息を切ら

せ、かけまわった年でした。

◇なぜか私に「朝日賞」推せんの用紙が来たので加藤周一先生と書いた見事受賞（当然ですが）。私は推せん者という晴れがましき！ ちなみに、昨年は日本エッセイストクラブ、山川菊栄奨励基金も私の推した作品が受賞、あたり年！でした。

◇「ヒロシマ花物語」の中の一編が英訳されることになりました。アメリカ人に原爆のことを少しでもわかって頂ければと思います。

◇「広島第二県女二年西組」原爆で死んだ級友たち」のちくま文庫版が六年ぶりに増刷になりました！

（横浜市 関千枝子）

◆昨年8月末に同居（一年間我家で）のポーランド女性（26歳）と二人で彼女の家へ五泊させて貰ってアウシュビッツ収容所へ行きました。とても重た

い気持ちをひっさげて帰国しました。

（大阪市 吉田悠子）

◆昨年は「遊ぼう」との計画でしたが、ゆとりの時間はなく従来以上に多忙な一年でした。プロカメラマンの次男が独立と共に、私の仕事の後継者を引き受けてくれましたので、これで私も「遊べる」のではないかと期待しています。

（大阪市 澤田和子）

◆私の文章を本にしていたいた感覚、感想文出そうと思いつつ、夏以来、体調わるく失礼します。

（松山市 檜垣幸子）

◆昨年ケガをして、失速状態のままです。学校で若い人たちと遊ぶ日々です。

（八王子市 福本英子）

◆正月休みもなく、仕事に追われています。

（東京 梶谷典子）

◆十二月十日、やつと結南（ゆうな）が生まれました。五月ごろまで休みを

とる予定でいます。（東京 与儀睦美）

◆九四年の印象深かった仕事・活動

◇都市河川の浄化事業完成を祝う「庄下川水まつり」の総合プロデュース。市民や行政の担当の方々とともに、様々な分野の友人・知人に助けていただき、成功裏に終えることができました。なかでも、市民手づくりのキャンドルによる川辺のライトアップ、ドイツのアーテイストによる光のインスタレーションは、都市風景の新たな体験を通して川への関心を持つきっかけを提供できたのではないかと思います。

◇継続して参加している文化のソフト・インフラ整備を考えるプロジェクトでは、各地の先駆的な芸術創造活動グループと出会うことができました。

◇アートを楽しむ拠点づくりの計画、大阪・都心部のまちびらき事業などは、今年も続行します。

◇国内・海外ともに、気持ちの通じ合

える様々な分野の方々と出会えた、幸せな一年でした。(大阪市 橋本敏子)

◆四月から東北大学大学院法学研究科リカレントコースに入学し、ドメスティック・パイオレンスに対する法的規制などの女性問題について研究したいと考えています。(仙台市 小島妙子)

◆松飾りが晴れやかに歓談する人々の新しい抱負を確かめ浄化し爽やかに期待し祝福しています。経済学者のラビ・パトラ教授が瞑想法で予言する世界大恐慌初年度は静穏に明けました。かん難が叡智を育てて辛苦が心身を鍛え激変する時代が優れた人物を育成します。自然の摂理に素直な人々と共に終生の記憶に残る素晴らしい一年でありますよう祈願いたします。

(東京 金田絢子)  
◆昨秋ドイツ・エカンフェルデ市で開

催いたしましたアルブレヒト由子招聘「第二回 日本女性の手芸作品展示即売会」は、市長夫妻、独日協会及びシユレスビツク・ホルシュタイン州議会をはじめとするドイツの方々のご協力のもとに成功させることができました。ご支援ありがとうございました。

(名古屋市 高橋ますみ)

◆四〇年間活版印刷で暮らしてまいりましたが、昨年九月、時代の流れて印刷界から離れて、現在電子部品の管理会社に勤めて居ります。

(東京 真下久司)

◆三年前に持病が再発して闘病中です。長男は二児の親になりました。

(三鷹市 近石綾子)

◆昨年二月より自宅から車で三〇分ほど離れた大湯リハビリ病院へ入院して、温泉治療をしております。いろいろな人と会うことができ、今までうち

の中で過ごしてきた私にはよい社会勉強になりました。(秋田県 大里知子)  
◆老親の介護二年三か月となり、ようやく慣れました。(岐阜県 富田 栄)  
◆夫は現在マニラ、夏頃の辞令で次の任地が決まります。子供二人は高二、来年が受験ですが、私もまあまあ順調に仕事を続けています。

(目黒区 北村三和子)

◆中国復帰前の香港で、太郎と大学や劇場を見、五郎の家族とシンガポールに遊び、アジアの活力を実感しました。明日の日、子や孫がアジアで生きられるよう、戦中派は、十五年戦争の償いのためにも、法廷で陳述したり、行進の先頭を歩いたり奮闘しました。「お産の学校」も続けています。

(東京都 杉山次子)

◆製造業はなかなか大変です。今年は営業に力を注いで軌道修正を計るつも



りです。でも自分で得意先拡張できるのは楽しいことです。

(川崎市 山里倫子)

◆下の子もようやく歩き始め、あわただしく日々をくらしています。ますます厳しさを増す世の中ですが、くれぐれもお体を大切になさって下さい。

(市川市 横山れいこ)

◆去年、子宮癌を抗癌剤拒否で闘った私は今年も闘病続行中です。すべて休業中の中、へあこらもお休みしようと思いましたが、賀状の御挨拶にまったく同感の私としては今年もへあこらに少しじっくり目を通していききたいと思ひ直しました。

(北海道 小田島美影)

◆夏以降、とんぼとり、にすつかり遠くまで行つてしまいました。いま仏道修行中。良鶴は法名です。今年もよろしく願ひいたします。

(草加市 池田千鶴子〔良鶴〕)

◆経済的に独立と思ひながら、まだその目的は達成できていません。今年こそは足がかりをつかみたい、今年一年が心からよい年だったと思えるようにしたいと思っています。

(横浜市 新見麗子)

◆心ならずものごぶさた重ねますうち新年を迎えました。殊更に細字を用いますのは、私儀旧冬左頭部の手術を受け、ふしぎな倒錯的症状三十時間ほど体験いたしました。ちよつとした転倒打撲がもとでCTスキャナの結果「慢性硬膜下血腫(左) 水腫(右)」を発見され、左は即日手術で、三日後には手足眼言語、皆正常に戻り、異例の早さとか、十二日間で一応解放されました。但しこのあと二、三年はCT検査隔月、忘れてはならない投薬(外傷性てんかん抑制)を厳命され、以前のよ

うなハードな生活はいけないようです。しかしこの展開は幸運だったのだそうです。人さまは頭蓋骨穴ふさぎにセラミックを入られたとは思えないとか、苦勞なしに細字をお目かけたせいか、変わったのは髪がとりはずし可能になっただけと仰言つて下さいます。

けれども本人は頭に時限爆弾、心に鉛を抱えたようで、崖つぶちを歩むが如き去年今年です。医師団は「おめでとう」と言つて下さり、悪運が強いと言つた亭主もいて、幸運ではあつたようですが、敗戦五十年、締めくくられたナの実感です。ともあれ半人前にしろ、五十一めの再出発の列に加わらせていただきたく、精一ぱい努力はいたします。どうぞこれからもよろしくご交誼ご高導下さいませ。

(桶川市 岡田まき子)

〔編集後記〕

千年に一度の大激震が永田町の直下でなく、神戸の、それも、最も勤勉な人びとの住む地域が集中的に破壊されたのは、本当に残念で、悲しいことです。

〈あこら〉では、〈あこら大阪〉を救援本部としてカンパを集め、被災された〈あこらメイト〉の皆さまや、西宮の石井さんなど、いま一番有効で具

体的な活動をしているところを送ることにしました。「長い継続的な救援が必要なので、あわてず、状況を確かめながら、一番必要なことを考えていきたい」とは、〈大阪〉の澤田和子さんのことばです。

むりをせず、それぞれが、ご自身の問題としてのお心をいただければうれしく思います。

〒533 大阪市東淀川区東淡路1-512-443 振替0092010

〒565 大阪府吹田市千里山西6の28の11 山際美代子さんです。

150400 澤田和子さん  
次号(205号)は、〈あこら大阪〉の編集で、「安全を保障するということ——阪神大震災に思う」を特集します。

全国の皆様、さまざまな感慨をお持ちだと思います。ハガキ一枚でも、ご意見をお寄せください。

メ切りは二月二五日、宛先は

〒565 大阪府吹田市千里山西6の28の11 山際美代子さんです。

◆ご投稿をお待ちします

◆あなたがお読みになつて感動した本、参考になつた本の感想をお寄せください。新刊本でなくても結構ですが、その場合は、初刷の発行年月日を記入してください。またページ数、定価(税込み)もお忘れなく。本のサイズ(判型)がわからない場合は、天地と左右の寸法を計つてお知らせを(できれば現物を添えてください)。

◆書評は書けないけれど、ぜひ、すすめたい本——現物を、「あこら読書室担当」までお送りください。検討します。読書室にご寄贈下さつた場合は、書評とは別に、「寄贈本」として掲載します。

あごら 204号 ●発行 1995年2月10日

●編集 あごら編集部

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 定価883円(857円+税26円)

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあこらへ

人と人の出会うひろば

へあこらへ

人と人の共に生きるひろば